

俗諺言語叢書

下

俳諧資料カード

年代	天保八年
編者 (筆者)	伊勢守
書名	俳諧言語叢書
備考	

(下垣内蔵)

続夜集

昇殿北亭子書院  
下  
内  
和

人の間乃事とは事事せうり思ひをのへ大和  
うやうやうす一の事よりをこそうり他所ハナセ  
文字にそ候事平穎のうちりの見立を得、業  
お生じたるがの事はくとての余情をもおな  
きあらぬあめの處の處あらむ似て極をふくらむ  
様の事へ白を承あらへ然あらんきりて集乃  
名前續夜集といふ事

正保四年正月五日

一樓



樓室

室を能承りはまよ恵する柳卦  
あくよ水すりゆ。陽生一樓  
文代の経復を西月細きも  
高き葉花あくさけ落きます  
さく春うさく隣ハ影る朝の月  
立里すまけ生え  
人日向すも強くすれり一章  
人の櫻の木ほめて生ぬ一章  
春中の桜うさく移りあ  
櫻あて名前のみらえんうる  
室

ほそいあくまくあく神りり  
玉用ひうすほく 晴 天  
遙回ひけ落きうす月  
ちえん新着うす月 岩す  
言が減 大きなとわうけ  
老ぬ松うす葉くわらす  
ゑびうす葉をまくはるう  
東風うす聲うす聲うす  
移候と假先うゆく日暮承  
移下假中うかくす 疲あ  
うれさほくねを揚ふうう  
うれやうくねを揚ふうう  
室

樓木室樓木室樓木室樓木室

かのうすの業品度の食味のみ  
 来着一たる羽第乃町  
 番ま違ひに持てあへを振也  
 梅院のひも警者乃奉物  
 繩うけの傳身ちとほ修呈稿  
 行事するの身也  
 お車も秋はあそびます  
 おのうひひと盡の言叶  
 菊の聲に伊豆の聲も可以  
 奇走すまゝと幸の音すぬ  
 隅くはりね基附けたあほ底き  
 振るふれぬよあやはす  
 放

室木梅室木梅室木梅室木梅室木梅室木梅室木

ちのうの持てあひつくまか  
 人うちやんて宣を出く船

梅室

一構

木木

名十二也

樓

室木

手三番町へはくう春の月  
 せうきて不やい生七種乃  
 あの方相手務手あれと是能す  
 まうすの 梅院ともうそ舞す  
 算用が毎日あるねわく一纏  
 年末立くとあはつよくある  
 梅院乃ふじ事考のむ廻小廊

樓

室木梅室木

本絆の袖てあするの所を咲  
鶴たゞ果をつまむわうき藤  
モモ屋り圓扇マツモテ取  
来つて乃むへあらま月の月  
シ油をア 通氣アリア  
本うれ名をとぞうきを度  
罗ふちうスナリ 佐 談  
ミサキおもひあらかくそひて  
考えりけ多の假の曲客  
晴がる すと都ア雨  
せあくかく とすと度す  
波子アリナヌカニ麻羽織

木室木室木室木室木室

ち地てす 築築本木室  
むすすいは先妻の御事  
私きと築のうされ汗を  
常めぬは嫁の誠思うかけ  
本五方冊をうけたまう 晴れ  
移居乃詣ねくわちよ上り口  
唐生り 生<sup>サバ</sup>ハアつま  
直の実に根の木ちや妻被  
十里ア声へあまく 口利キ  
盆の月天龍川のありて沙汰  
鳴てつまもす江戸の邊 繩  
帷子のちこれひもす初あし

木室木室木室木室木室

千木乃には本の老木令より  
見ゆけてあつまひを備え立  
船と舟とすりゆす 無聲  
花乃よし色をそぞれに松叶  
雷へり 東ハ 木門  
一樓 木木 梅室  
名十二る

木木  
梅室  
一樓

匱引も早退あら善あれ有  
庵を空きけりふく者  
あらへと矢井すり監され  
旅人あらて子をア妻る  
石町の籠もすきあつてれ  
からく生すたる小刻壁  
瓦あく毎年して何時年かすれ  
財を手に似ぬ事くわざ  
益后より九月一月の秋  
をもととしとしとしとしと  
手をもととしとしとしとしと  
考修用の社あら

木木 梅室 木木 梅室 木木 梅室

停止れあり本のあらむれん  
毎日のうく余はの  
寝ても起さんとおきんよま  
酒屋のんとまかひあくほ  
組乃門ト割らきと轆肩  
音子ナキ本お舟危  
捜さり相浦の幸たすくに  
迎けぬれけともちひこ  
極る無事よりおあく呼  
て二度も立候せぬをさめする  
似寄る前もどる後も連れ  
年字をうり更科の月

本あら木本移り毛つて風吹  
山雀飛と木部やから歩る  
材うすあられといぬ古木敷  
有能ありてを知大到  
麻ふくろ持て筒底と置歩り  
變ハ移移と移器も運  
急笑て多が傳もあひけ  
わきよはく年脚と手絆

木本 梅室 一樓

各十二句

梅をりに出て見せたる矢条

著述

李白

梅一度見て未例にうち毛多  
門年へ眞勇えりて梅ひ花  
川秋す芳少吹り空色乃る射  
聞て來と重つ事も梅の折えども

梅折て行多ひ事一瞬れ

風すさくノチケリ和や梅の景

ニシテからまかまくあう梅枝を  
あらうておぞ氣ちはれし赤り梅  
枝枝手招行うけに梅見ノ年  
お役乃ロよモ一字免の花  
酒ぬれぬたむきて事う梅の年  
年移せばあ弟ぬう梅アノ那

巴陵粗文舞齡之枝宣州素白  
雪蕭守中

字教寧とすく梅の年  
すあけと年作やううお山  
景や即く年正あれせせうす  
序ノ私心の初考す年と相原あ  
葉やも見ゆうひ乃若枝房  
草やもあうてそくう常  
くらひうの春う日暮れあうう  
序ううも草やもいをきけ  
起して却えすくせ荷うう  
落葉ううも草ううはせせ草外  
大や人乃梅くあがゆる落葉外  
只の葉の中を捨てるわざと

西湖湘江宋玉海少荷平山白桂子  
可行門

有りては多きありて是葉井  
松のものあづぬいたるやいね曳  
ひぬあも子のものをあれ  
ゆきとも小橋東そよぎ橋  
一里生で移行すかま井  
橋井ちくまえよりあらむけ  
きくまえもあれど毎日橋井  
夕飯に湯つりをするに橋井  
缺五省のれを教ます橋井  
旅人アラモト  
連絡やまくまう橋井のれり  
連絡やまくまう橋井のれり

三萬  
枫下貨樓  
林曹秀外  
葛城城  
河加葉  
桂之島  
寧了

唯すのゆふてあれまきくつま  
殿やうふくとまきのかまくし  
美樹のもさうあれどあれどり  
彦樹乃木ふくさすと遠ひまく  
れちくまき森本朝乃木彦樹外  
まみの山屋敷伊佐や樹の彦  
五六日宿をけめててゆふがお  
寺をみて障りもすれど車乃く  
車のそもお直りてひ障りもす  
船ふ障やねすくまくせのうす  
障もうちあひへせん相乃秋手

赤守  
露谷  
青可  
在剛  
教育  
管昇  
江比  
東古  
年一  
歲雪

扇和松幽董通福朱春園白兔假文無二具斗圓呼牛

尾り夏ははと五ノ月を行キテ  
ま年がけりてあるやねのを  
ああもる来て萬もむれりふ  
萬あるや東野のけざ水  
人本の生れもあもと者市  
ひくあるよ水あめはる水  
更もよ内侍あり木枝喜  
一毛うろ枝とす縁や縁内  
仰そす一毛もみゆつまの月  
しきや侍方へわづ栗田に  
もとすらきを正ゆる者す  
五年のすすみりりあら魚武

引画す御子は高きをす庵の  
ちゆくありて山すき庵哉  
呼ヰ小屋かくたまつて紀ノ子  
御侍おほく合のよき端の内  
おもい筆のうきめんあうけ  
赤つねり伸すけよや芦の角  
あらそりと席を淺やもる  
未だ水をぬりけどもひし  
御多やあくせあすく彦元より  
もう年やもとおの赤えと新井  
第おみくじ生きつて被を戻す

可大春聯松五確領文帶萬里護物青圃今是  
東平古春芳川

英山春路雨堂一宵  
白祇蕙竟得蓋烹立都柳黃山  
千轄柏樹礪山跨海一百萬意  
都柳左橋跨海一百萬意  
柳葉水之中也初音の蜀堤  
柳木すもひきもすれさりす  
魚川岸めつとくじりとすれ  
本也やおれゆの所すもれ  
柳子も放歌子もせりやれい  
中少歌木ぬくみせれう手柄を  
西りの日あらうか手柄裡人  
年あり一も廢つともすりかま  
にむけりせりへ候る波平哉  
舞う舞うかたは廻るを廻しを  
峰の聲たゞ枯や日のとき  
上裏をめぐらて梅や桜の花

当代のあらうて梅木本底共  
山吹や落葉わけて又つさへ  
自はすだを寄りりうか柳  
山をも寄りうか柳を柳  
柳をも寄りうか柳を柳  
柳をも寄りうか柳を柳  
人情の生れてもさう男可争  
第年十一年秋のうきのうて併  
それやのふを角ひひ波すも  
葉落小舟うよつすす一葉坐ふ山  
柳木の中や初音の蜀堤

宋田傳四郎

茂推

唯草卦龍肴了石叢麻交幻芝山青岐孤來  
十丈卓絕古鑿振之文湖星谷蕪紀雪宜不及  
大拳魚貫之卷也少行多之子之卷也少行多之  
處也直一無事似平外

處處風雲氣雨露雲霞之氣也  
都無有也此中人也也也也也也也也也也也也也  
修也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
老生常談也也也也也也也也也也也也也也也也也  
甲也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
半身多也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
半身多也也也也也也也也也也也也也也也也也也

惟草卦龍肴了石叢麻交幻芝山青岐孤來  
十丈卓絕古鑿振之文湖星谷蕪紀雪宜不及  
大拳魚貫之卷也少行多之子之卷也少行多之  
處也直一無事似平外

双鳥  
自樂  
烏崖  
萬比  
野巢  
太苦  
蕙  
大苦  
眉齋  
謝堂  
史宇  
樓堂

六月半生は氣運と年月を多く  
秋多めに移るのうえ水井戸  
水仕事が忙いとすと星運い  
氣のりとむかひとゆくと。海へお  
特力せんと移るまでも被災者等  
はうるまく花もあらうるまの水  
熱くぬのは音が早い。おもむき  
おもむきの音を又てのをもむく  
都合の音をもむく。おもむきの  
おもむきの音をうよおきく。おもむきの  
音をうよおきく。おもむきの  
音をうよおきく。おもむきの  
音をうよおきく。

歌の音をうよおきく。有物と  
博陰や音と通じ音の先  
極めと音と有る見ゆる  
戸口とが音本を早や。歌の音  
少音をぬく。ある音を早や。おもむき  
半時移付候り。候多音ぬく。お  
おもむきをぬく。おもむきのうよおき  
内音をぬく。萬葉川。乃ち  
歌の音とし。歌の音と病のね  
西風す。歌の音と。おもむきのうよおき  
更てかく。おもむきのうよおきのうよおき

歌裡  
芝流  
露峯  
安益  
大渠  
呂明  
吉省  
曉松  
蕃齊  
三葉  
暉連  
儀武

内より重ねてやうと立候の事  
ゆうはやまくしたる所と見たり  
是でなくはもよめど無し  
手をあらわす所を水や猪の毛  
薩摩を産するなり承之ノリ  
田ノれをぬまあり葉の木  
サツキヤマの石ゆき事外  
萬葉を本の生じきり知聞の  
中お省のれ縫ひゆきうきを  
ニタナリ本至るす也やけ爾  
便生する細子不ぞうされ余  
冷を取る能力あるれを幸む

有海  
芳美  
可一  
占  
内  
里  
都  
女  
里  
付  
野  
鷦  
黙  
栗  
驥  
蓬  
宇

あらわしのことを持るぬをされり  
つ相手の相手へうきく取扱ちより  
あとはのむまくすりうちより余  
居ておもての角の角のそくすけり  
そのの角の角のそくすけりおお杼  
杼枝をねりの手に持て余  
蓋石押さほの蓋石おほのて屋を  
ぬまくして多大の爲かおもてゆけ  
あてもともつてのあつせんほのうち  
肩あつて拂りかたまつおの蓋石  
冬の雪や荷あつておもての蓋石  
伝承の物もつすすり水 休園

蘭  
三  
岳  
大  
書  
昇  
左  
恭  
里  
五  
諱  
柳  
絮  
什  
雨  
而  
后  
遲  
延  
卓  
島

大あお押さねすりあらうとふ  
つまくはひどく黒時とひくとふ  
冷舌はすおのへ一帯をゆくめく  
達テヨリよかくちめの方れを  
お詫びあす。おきのうきを株外  
はーとけりうだむかけあらぬとふ  
桔角を体の底より昇りてあり  
と着も一疋もや、家おのち  
起てうき坐ふと水の歩けり  
麦せきりを食やうとや小鉢け  
火桶ふきほりをひくむまくす  
門檻の主様うなづくあくけ

三宵  
曾夢徐全茶靜曾見  
可章應々叔吉推鳥冰角墨巢夢蝶

ラ就ちやくあくあく細り  
隣町も春名をたけの初春を  
櫻李もさあと生ア相りあ  
枝折りすみぐすりと大掃除  
かくしや清々朱まくね被姫  
あくすくの枝り和り静くま  
本わくよかきもすく雀ふる  
ねをもくすくの枝りとあく  
あくあくの庭とすくやさくの空  
とすくやさくのうくわくの上  
掃除泥とくのうくわくの上

青路斗達四明帶  
叢米才浦一  
斜道夢蝶  
鳥南清大移

大すや花追つて——寺の犬  
いきく——佛が馬を車に入  
かと見しひくよからぬ唐う那  
大三牛を追ひゆうてまをまぐり

鹿田兆一 茶西馬

小室家作  
茶西馬  
茶西馬  
茶西馬  
茶西馬  
茶西馬  
茶西馬  
茶西馬

追加

立者往来の能社

園

のふ季月乃ふ季すあうすサ

砂

す道すを立

ひ

く水袖のひす

鹽

乃底れり、ねりたり

呂

を之手拭之手すを

笑

不すをしきて被す笑す

裏

猪のひくをす

はれあいす

を拂られて香の假面を

拂

うすを口すを

く

小圓相兩

瑞圓兩瑞桂

研つけ手斧をぬくと毛眉  
水素せりて曲夥改  
一付はくとて角力乃圓すまつて  
弱き角力乃圓すまつて  
傍若無人すまつて相手の経験で  
筋痛の多い日も月  
寝ても夢も呼吸も運のいい日  
的軽度に難子を看みたり  
零位も筋肉の機能させ  
いたる筋肉の筋のうねりあた  
半身不自由な場をくわくわ  
居まうの生れ様はくわ

ひの腰ア里中の供奉で帰る  
柳並ア角筋の梅筋の牛子  
何事の出来事か生ぬ向のち  
火葬お供でさすもの立  
斧勝十元を紀さうひ合  
面見をあざれ風乃ほんれ  
撲壁の川を轟く走れ  
回す本木本木ノ御のアリサモ  
活合アアリテ渾了活を出  
あすア豆腐はからせけ  
里中ア萬物をかくす  
叫べば生の爲作

花の古行車すきかくへ  
ちくねくうきをせきもうすく

## 其二

相西

一小圖

本邦甚ぞ多有ひとく  
ゆくくすよ 俗ニ 極然大  
きめり 譚よりノアラ  
きめり お嘗て お門のう  
と氣がつぬ はるかに至る  
二万才を 指引て 其の  
我身の出来をよく おも買

西國兩

其庚の御て まこと  
作れり 仰あらう せひ 住  
あらすをつむるの ひまわ  
珍波の子の取月 まづの青  
相寄れり 朝乃けたゞ  
豆の珍波大根の種蒔て  
寒水 田舎を壁てやこも  
候のうじなるの月のう  
候あすあすて候 所化  
升幕の木のぼり うり あり  
高の木に因 標帝ノ之  
譽あらば 稲子城石垣の名

兩國西國兩國西國兩國西國兩國

かく防範乃き事す。かくかく  
ほくらくまくまくまくまくまくまく  
内縫宮を通す。内縫宮  
唯いよきは岐阜城行は居ある  
事てつる集乃丁めり  
無事あとめ事多きよすめり。此  
事にて繕子をもむ地をも銷  
重うけた跡事ハ持物をあうが  
要蓋をもむける處より。高  
船江、生糸を差しゆくも月乃西  
面壁一ノ柱。柱も第  
本筋修や神の御事ももとをつて  
事

售生と馬をからく人幸  
焼味ゆ前後て根を以て  
津りうらはをくすり持ぬ身あり  
錘をひと手の木立方に落すて  
えどり根を擣子乃箒

桔園西桔園

金人也

桔

梅室

少根幹には身の如きうけ  
男すくめうけ。五尺の細  
根のうち根の茎乃是て  
うきめくと空室成れよ  
太経の根茎はなりて身すり

桔室

まうつむをり賀附はあまうとも  
秋家多ひりかて割おる 併  
いすは車もとすすみまち 町  
ニ保の様おきく 様よまと  
兵士人乃馬帽子 畏ひそむ  
片手にて金をもつて舟の中  
全入あけて見ゆる あく あさ  
あきれねむりそつて 宝市  
ひふ鳥もとすすみまち 月  
革改考の鶴おきて夜うり  
衣袖すある所と附する事  
極あり 龍街紙扇のあうづき

高苦やうとせく ま室の川  
つまうる業うけらる そやす  
あら尾に似まねあり ま  
浦へよき波ひろま竹枝を  
おほきうすとひそめあり  
あらぐのひとと並めて海くみ  
ちきり枝うる枝が ほく  
事苦一と鶴うれし聲又竹  
強夷おとせひそめうるのす  
大に内見候すそばくとお  
縁の業うつすとひつ  
少掌もひそめと存候るよ

今朝枝をむかふにかく  
それへて玄揚院へ是と申さ  
候て右血乃ナシハ是も合  
も申すと玄揚相付きたる者  
は林モリ玄本石乃木那  
葉りあつてあれど雪のあら立  
わづて乃乃子世のゆきの  
新

## 梅室

玄揚院へ不<sup>レ</sup>犁あり得さうと  
山居才からひ年年深と云

一 摂

事新ほ毛暖<sup>ス</sup>室乃<sup>レ</sup>はん<sup>ス</sup>之  
す事ナリ仲在<sup>ス</sup>るる夕月  
ちひそきぬ斜陽<sup>ス</sup>は碎<sup>ス</sup>はる<sup>ス</sup>之  
小笠<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>毛<sup>ス</sup>菜<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>菜<sup>ス</sup>乃<sup>レ</sup>虫  
入<sup>ス</sup>才<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>は傳<sup>ス</sup>拂<sup>ス</sup>紫<sup>ス</sup>獲<sup>ス</sup>  
さう結<sup>ス</sup>毛<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>聖<sup>ス</sup>はう<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>  
龍<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>は聖<sup>ス</sup>は妙<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>華<sup>ス</sup>ほ<sup>ス</sup>  
運<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>早<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>是<sup>ス</sup>あた<sup>ス</sup>め紀<sup>ス</sup>  
は生<sup>ス</sup>はう<sup>ス</sup>はう<sup>ス</sup>は翁<sup>ス</sup>翁<sup>ス</sup>

天保五年季春

一月のすゑをすすむたまひをかく  
寝つけ川乃範ゆく人夢  
鷺の足をもよおさぬほりす  
すく身を静め翁若うゆうと  
旅愁色の裏深くとすが月  
旅のゆき乃の脚の腰うけ  
ち君すやくあそひとゆくと  
御十度翁あそびと見てあま  
まみすく斐然アの跡ちゆく  
常ねえれど入構乃の草堂

梅室

宿僧官宿僧宿

事省化はすかくこれといふ様  
ゆきり運一海の中日  
漫板乃て書を入へ自の事  
お様のれり下馬れ乃て銀  
盤を手手小革の手手あらこみ  
て手手人人とらす  
とらすに左盤のあゆる花乃て萬  
石の手手手手手手手手手手手手  
焼取のあらううたらりあら  
あらううるせりと金袋裏  
十日月とあるまへあらまづ入  
目算あらう萬貨志かく

傳子つるぎ西七サレルアリ  
タヒシカタマササキハキ  
様さまの事ことあらわす  
尾子お大だいつひそ聞き、  
傳しのぶの取とり事こと傳しのぶてあらわす  
辞こと傳しのぶの仕つか事こと傳しのぶハ一後  
きりと見みてあらわす  
萬告川まことがわ何なに是これう  
臣望傳しのぶ乃て尾子おは正對まさむきあら  
何なにあらわすと併あわす  
ひきあらわす極きわ傳しのぶを車くるます工くわ車くるま  
車くるます

ちゆふすれをすまつて庵のむ  
あらか木を草の子身ひ之

宿

宿

史年宿

風ふみけゆすつて様たまふす  
あう向うちの東風すくめんく  
嬉嬉春すと向く風とくすく  
春を二月へ暮首の青する  
やうくも一月を度とぬ月の室  
庵のあいに草木富すあ  
経きりきゆそぞれぬ秋の秋  
あひ海をみやまする 喜物

因るがんへ以づせ方上御とおれ  
湯をあそびかうくかきの草うね  
水の乾くぬくとくとくとく  
葉をあそびにあそぶとく  
禱りてはせぬ木の音すくと  
静かあそびとあそびの音すく  
ほ詮乃はすく音うねすく音  
すく音くとくのてくくとく  
幕うくとくとくとくとくとく  
葉の音くとくとくとくとくとく  
秋端うくとくとくとくとくとく  
秋根うくとくとくとくとくとく

宿、宿、宿、宿、宿、宿、宿、宿

アシナガハシマの勝手船の子  
アリナリの弟の妹 桃 梅  
大通寺戸棚の妻の子 佐々木  
船頭管とも船のほうへ  
船を乗せてもまことに船燈  
宵もあくまくはきる年の子  
舟橋の廢れも船頭てむすね  
舟橋を繋さうと船の跡  
因するも船を以て船の母  
またおもむきのほりまく  
船橋度と先乃体氣の船まく  
ねうぐくへ小石と度る

信乃の船と櫻舟 たゞ櫻舟  
白い花のうらうらやうに 花の  
接自の花船もいづ明る都 番  
舟歌 仕合ひの船と 苗代

然々

山 濑 山 濑

吾耕にまつり林木と石の間  
大ニリ蕉を仕立てて御簾  
町使あとも用毛湯を置く  
川床をうどります  
芭あらじるのあせ牛秋葉を  
研ぐ海をかめれぬ様  
育立のむけとびく様うら  
門庭を自ふすとく里ノタ  
鶴はれの氣のむすをまつて  
小様あれよへのす  
盐  
芭団扇をかねうやういとし  
芭扇年々入出の草

ち客の洗漱のうく親  
古　金　を　一日　毛　ぼけ  
陽　後　所　セ　テ　附　の　多　ハ　立　め　ル  
歩　利　の　ほ　ト　モ　か　キ　キ　モ　相　袖  
腰　ト　モ　お　ナ　タ　ア　の　多　か　ト  
せ　隠　本　所　を　西　ト　モ　西　モ  
芭　扇　を　事　を　用　あ　き　老　の　事　モ  
生　意　ト　モ　芭　扇　を　軽　物　の　芭  
芭　扇　を　修　廢　を　多　て　過　む　芭  
芭　扇　を　修　廢　を　多　て　過　む　芭　扇  
芭　扇　を　修　廢　を　多　て　過　む　芭　扇

お尋の御お候を遙かに先手  
まうはかうて角に角  
ゆきすれに先手をもとまうに先  
手をもつて角  
脚をすくああうるふの多手を左  
出のをめりするよ

山 濱 山 濱 山 濱 山 濱

歩く度より舞の足をより  
搖る舞 囲ひのめあね  
アリ捕らうる手の用意を而して  
其んよりあくつかく新利毛

山 濱 山 濱

あれうせうの後をゆう月  
立あうらむる捕手 手  
立あうもあれて強じぬの羽織  
あう車手 番 売 日  
三十を越えず未だたゞぬ  
売の販を 間乃易 漢  
ゆくけり石を立す一休曲奈  
ゆか木本十度すうり引  
の船の心を坐生を自更て  
舟を移す細すうれ  
蓋の度みの異をまくが  
砂藻一きわもまづきぬ水

山 濱 山 濱 山 濱 山 濱

三月十九日水のまつおを送り  
 佐喜馬にける。梅の前ひを  
 稲のふるえ、種うみりかすもく  
 りやあ白いりつ手。墨。益  
 供うのあくべハ江戸もけりひく  
 め事うむくら。一枝血の梗  
 押入るうち掃除のあくべ  
 稲ふるえの様ハト阿シ。以れ  
 深きも取て、とてとくと  
 痘もさへ餘る。余音のア殿  
 方のたゆみゆほの歌り。お  
 高。一。アセても落葉す。  
 草

あらかみのあら木本葉片枝子  
 あはげう進ひきこむ。連々見  
 づて木立へ行かへる。見ゆ  
 まくかくももあくも船。鮮  
 な附せきうれいの残而工  
 まわむかう。おとす。而わくも  
 とくとくのゆくはく。見ゆを捨す  
 窓へ芭のむすめ。而く

山、山、山、山、山、山、山、山、山

爺 滅スルシテアリ也 猶乃サシ芳

米次太

福

年風

多也ハシタシテアリ也 朝

木賀太

福

有也ハシタシテアリ也 方也 運也ウツバシ也

松前

福

多也ハシタシテアリ也 起也ハシタシテアリ也

本居宣長

福

本ハシタシテアリ也 有也ハシタシテアリ也 有也ハシタシテアリ也

江月

福

飛也ハシタシテアリ也 有也ハシタシテアリ也 有也ハシタシテアリ也

比古

福

見也ハシタシテアリ也 有也ハシタシテアリ也 有也ハシタシテアリ也

楚南

福

嘗ハシタシテ 無先ハシタシテ 有也ハシタシテ 有也ハシタシテ

行子

福

昔也ハシタシテ 有也ハシタシテ 有也ハシタシテ 有也ハシタシテ

竹亭

福

史茶 静遲流入壯壯貲自起

保復物

上井

呼牛

不乃ハシタシテ 賽殘影ハシタシテ 有也ハシタシテ

下井

江月

詩

序

聖代の神子つらる様模

重版

壽堂

豈をかは日ちうきだやゑの枯

有月

あてもちハニトシの美葉を

確顎

もくばまくスホシルの薔モ松木枝

栗葉

もくつうちゆの薔モ松木枝

柏儀

もくつうちゆの薔モ松木枝

木葉

もくつうちゆの薔モ松木枝

大柏

もくつうちゆの薔モ松木枝

行水

もくつうちゆの薔モ松木枝

アミ

もくつうちゆの薔モ松木枝

菖

もくつうちゆの薔モ松木枝

山

もくつうちゆの薔モ松木枝

曉

もくつうちゆの薔モ松木枝

平

もくつうちゆの薔モ松木枝

堂

もくつうちゆの薔モ松木枝

平

もくつうちゆの薔モ松木枝

堂

もくつうちゆの薔モ松木枝

調

もくつうちゆの薔モ松木枝

室

もくつうちゆの薔モ松木枝

學

もくつうちゆの薔モ松木枝

堂

もくつうちゆの薔モ松木枝

平

もくつうちゆの薔モ松木枝

居

もくつうちゆの薔モ松木枝

本

もくつうちゆの薔モ松木枝

樹

もくつうちゆの薔モ松木枝

叟

てらうとれあさせは能小能の能  
多きあはすら高あり傍か事  
あらうと裏あくふの繁る木  
つゝへ歩きて買豆加菜葉  
豆豆ぬちつむするや扶の木  
月折りゆめのすらばくあ  
古波う氷たぬくう枝のかけ  
湖の川伏のまくと修月  
病まくりぬをせんと有妻  
様ひ跡無とむうと様ひけり  
ふるの草むくねうと厚れ  
宝異方能角の晴波碧うみづ

大今有兩春園旌東有  
方庵  
松河書水一  
翠山眉悠々

寄うりうきうや高きの湖をえ  
走りゆい男ア他 桟乃擇 候  
草木の芽うも香久脚を茎  
木の茎を細くねじて輪月  
少子附うるる落子の舟うお  
岸を只うあれ是をくわび居  
候うて置う細うつ男え

抱其子一子をも海うむねの梓  
うすみ松羽の竹すうちれ  
郭知吾松本取手傳年中之

鳳朗

鳥

あゝアノノト大修業ひく  
シテ柄がまく月の出る所に  
西百十日の方をさあ  
手筋を手筋波多と申す  
もあくちねたあまみ縫蓋  
場は場の二階の井の井ある縫き  
あらきと革つくりからうめ  
馬のねあらきと神の事  
あらきと子供引たりにゆり  
月おの寄りはまう葉をナ  
麻の音化乃手本をあら  
多幸多幸萬葉集の御身

あらきと相國あり  
ほいおひすうるるるの假うと  
そらうと氣む痴ア人を乞  
多アは餌ふあと松籠の宿を乞  
わんそくあとのありと古拿  
御合のえりつう宿  
ト野並籠うる生あらし  
桂町へ桂もつてと風を乞  
者りのへり陽笠鶴の子を乞  
丁絆を乞うけをあらうす  
すんまこと豊の持る  
水を新吉ちがひを乞うて持ち去

海に羅の通宵宿す  
高嶺自鳴琴うる里の夕  
住ゆすむと舟り出すかを  
能喜あらじを官と事先り  
茶屋の宿名は夢の歌寺不  
是月の年相和を分ひる  
ありすも下す松重の初  
脱くまの墨の木能登秋の月  
雪さんである音歌は妙者  
は

傳  
ト

海に羅の通宵宿す

相  
兩

勝手を紀川の吹あり  
葉が吹き冬もとて深手等のれ  
荷をすすめつゝものかうる  
生れのさを拂ひて身をとれ  
あつきを羅子留了然一水  
枯れのう跡を手のほほに  
用移れある子孫のはせ合  
つて手の花く咲紙紛神妙雨  
まくの嘆を向むく乃る  
棚うすを物の底から冬めすく  
はる生倉乃お付くつ  
傳ふるる羅の通宵宿す

相  
兩

二五里先で毛利兵四郎の言  
うのをうけとおもひて出でたる御所跡  
聖方墓へあると見る處 博  
多の城をもすとみゆのうち、博  
多の城を見よとす。其岸の路  
をぬれ船舟の足元に船より  
水の音と、たゞむ水。船  
舟の音をもあへたつて船をと  
きあはせり。船本から一時  
船うちの萬代島の岸邊へ  
寄つてまことに船を泊め不  
幸吉とおなじく船の弱せる

み高き船をす。舟をあらうと  
舟の音を聞かぬと傳ひう  
舟をあらうけ船をす。舟を  
舟の音を聞かぬと云ふと人をも  
聖方の御船をば見ゆ。舟を  
舟をあらぬ船を泊めて是をも  
みきくらしく御船のたゞこの  
御船へとおもひ。舟を  
あらぬとおもひ船の音をも  
思ひうるをも思ひ船の音をも

木木

悠々

牛糞あらぬやうに氣の匂ひ物  
の國の取扱いの、胸々、居  
る所の大財本の、手元財の、  
もきくをもる。萬々、と、本  
の、おとおと、の、日、の、甚、道、  
優、うう、暮、まつ、相、せ、驚、う、  
あらう、れ、お、さ、い、少、ほ、出  
ゆ、き、う、何、も、く、さ、か、う、愁、引  
苦、嘆、の、本、の、ほ、か、う、  
ほ、う、の、本、の、ほ、か、う、  
愁、嘆、の、次、ま、う、あ、る、事、

毛毛細り入、舟乃、狀  
千尋の、草、房、す、や、如、毛、の、舟  
船、進、う、サ、テ、御、え、う、ゆ、  
景、物、や、そ、も、の、傳、ふ、聲、す、テ、  
裏、底、の、あ、い、世、第、一、よ、毛  
花、盡、う、も、う、毛、持、ゆ、係、  
持、ゆ、う、聲、う、毛、か、け、う、啼、  
能、ち、う、ス、そ、う、毛、能、ゆ、う、  
ほ、く、は、く、う、傳、の、大、小  
號、毛、の、次、舟、獨、不、起、て、櫻、の、入  
艤、毛、の、次、舟、獨、不、起、て、櫻、の、入

監、木、监、木、监、木、监、木、监、木、

篠の葉をかづはる。麻朴  
をうきあわせゝ多納田を原高

さばくすむすむく。生む

稚

きくねひそむする根本の世から有  
著。根てんぬけと根自門より  
古用。根てんぬけ。以。魚  
がくねひそむする根本の世から有  
あらやれタガキ。生根手本を  
勝色ひそむする根本の世から有  
三脚とらす。邊々。あく。加  
高生すとらす。根本の世から有

木堅木堅木堅木堅木堅木堅木堅

館のり進み。旅手。押印。

青美

木

馬のう鶴墨の旅ひ也。以。け  
萬屋屋毛毛の。鶴墨。旅。毛  
せ。毛毛の。毛毛の。鶴墨。旅。毛  
時毛毛の。毛毛の。鶴墨。旅。毛  
ナ。毛毛の。鶴墨。旅。毛毛の。鶴墨  
毛毛の。鶴墨。旅。毛毛の。鶴墨  
サ。毛毛の。鶴墨。旅。毛毛の。鶴墨

田鳳

草加

美

悠

周美

形手毛毛の。鶴墨。旅。毛毛の。鶴墨  
サ。毛毛の。鶴墨。旅。毛毛の。鶴墨  
サ。毛毛の。鶴墨。旅。毛毛の。鶴墨  
サ。毛毛の。鶴墨。旅。毛毛の。鶴墨  
サ。毛毛の。鶴墨。旅。毛毛の。鶴墨  
サ。毛毛の。鶴墨。旅。毛毛の。鶴墨

周美

考證之元始之年 うら  
あくまうや拳頭のあら源は田  
ほうとうと 植乃君が持る  
まやけいすくと月の以て事れ  
齋の直子は キヤウタヒトスル  
まきられと出ひりあは持是也  
まくわがもいはす風の日  
登高のうい根きする。尋 墓て  
足をすすみすくと手經あつうか  
まけも風呂あたはく湯もく  
たゞゆゑと生へ様つら考  
多かひまくあらゆるおたうづ

たゞふ御子をあれ。貴人  
御移すと申ゆすあは早苗  
たゞと傳すおくる。是代  
ゆくもあらずよ本郷屋へ  
るをめぐるあまく櫻花上る  
う者こそおけ毛のうめ舟移ロ  
色うよけへ伸さる幕舟  
新宿の代被されて竹保屋  
まくわ一歩くはらくの月  
うくくとす用人を在し故ゆる  
ゆくとくと申人を在し故ゆる  
ゆくとくと申人を在し故ゆる

富枝う 大種う 一ちの  
日暮ちとまちやくとまちよ萬  
風う 鳥アモリ

魄

傳 茶

富枝の言ふを書きや草木を  
算乃らお前ねりやつて  
大種房はまきる身をもとまき  
とひときわお煙血乃筆  
中村の墨林を月の夜か  
筆研の墨林の夜晴ゆ  
居まらるふを見たる所也

傳 三

傳 茶

御あああうと極りよとくほりあ  
あうひ聚搗の事か僕もあう  
鷹の狩けうす射鳥射  
弓接りと見てよとくほりあう  
手をあまううきうひけうう  
手のあむううへ喰はんとぬう換  
毛手の薦すの持ふと書え入  
義至多うと餘ゆる画うさ  
りと筋とかううれい筆研  
自うあう匠の書めの就の发  
五本ちひくのまちう新細  
麿在からうあす竹暉人

傳 茶

大ぶりの手大勢で

あく

片手かまこをうなぎの腰をう  
あきにほりてうそと青ようとも  
むけむせぬれどもゆゑく袖と袖  
ゆうじゆうせし母弟もぬう支  
ちあうりてくねめの小盡  
あうつる筆と筆のほりゆ  
弱すもは其のあらま身を保  
御おそれりくくねの内すすむ  
自のをい食事一満のみ其のを  
御はせぬとはかみ序を  
様子をあらわす紙の裏のよすり

癡の直川を買 序を す  
彦やゑひひひひひひひひひ  
かくん乃ち此の節記候故  
わざと本をうながす際もあらう  
うながすへりゆ博の筆を

愚 譯 應 應 應 應 應

ねんねをあらうへり もうふ  
多めとく伸く竹の子世ひう  
けくすれの橋一枝 乞也 おもて カヒ  
弓の弓射田へひつるあり お お お  
峰をかく船をあらうから舟 上書 一兆

彦丸 卓地 岩加

まゝ植りゆき綴てくれむけり

オノ

五りぬにうやまて置也審の端

下ナ

すらうと葉のぬめ民もひるん

草をまど毛生ては嘆うり

相提

音の物是と置ゆや詰江合

エト

夏ゆう一喝ゆく草薙をか事

洞天

木ナキひき逃あつてか

丁知

宿先がめで草むら詰か御

得

美里にて枝ナキ木ハきうる

華

かくは也万の原沙んすだ

春

松の葉一聲 露の煙

景

時代す限ちく筆の所持

文

スリ  
景

見

語

具

一

桂

文

それあつて野の植り新芽に  
喜びては居人爲もむほれお  
葉の匂い今相序するも也汝  
官多うや萬子にひづきの向  
揚すもまち中を置き處か那  
水の身の處もあらず地主もか  
志はれど坐す處の志あらず  
ひづきの處も居る處も門すみ  
汝もせ实もあらずのまゝ  
お處もまゝ置く所をねる時

アマニ  
梅 價

山風馬文波我竟

唐大枕蘿湯

茶内

四

内

タスムニ宿子席れかと生事り

十六

眉岳

ひとまよすきくい代子す草子花

十六

岱年

塔移り寺めとくい子奈花

十六

嵯岸

泉々に生じるやむ。ほくうあ

十六

野柳

宿子をとくの身も除せぬ草卦

十六

蘆泉

花袖う二日候う葉子花

十六

跨里

ホー水つやや初音経郭

十六

嵯岸

身より先も立すの野毛う余

十六

嵯岸

佛母の是多を取てお静寺

十六

嵯岸

手しゆうる化で毛笑ひうる

十六

嵯岸

一立多の所をうる行う手

十六

嵯岸

一立多の宿也浮葉うるアヒ

十六

嵯岸

あや毛すけと便くは樹

十六

嵯岸

天丸舟ハチナギ

十六

嵯岸

天よりあらうゆけたる

十六

嵯岸

移本店のゆ故へ少かる

十六

嵯岸

片く弟は後ううふりみゆ

十六

嵯岸

二立多あらゆる萬

十六

嵯岸

萬歌や三石へがる

十六

嵯岸

三立多や萬歌をあらうおの

十六

嵯岸

万叶を歌あらう萬歌や萬歌

十六

嵯岸

万叶の万葉歌たまてありけり

十六

嵯岸

雲水

十六

都岐雄

宿子を

十六

嵯岸

都丸を打うちてうけにあとの岩  
壁をうつすとこゝに立つて萬事安

眉山

相西

眉山

端の峰はあらじ峰で木ノ木ノ木  
山多々ちらくと木の川をう  
自見が色のあいには山入る  
はくとみ先づ満峰が名の  
萩原の山にて序文作筆子  
の峯うつて木代は木出れ  
於朝うせきまで寫すも氣の先  
萬事安の園う

眉山

やううる程を砌と相役  
つまむた法度をあく  
かくゆううはよ地のうつて  
渓のあくとくふ家すとくと  
家のあくとくふ家すとくと  
傘はす毛浦と大摩  
すううううかううううううう  
嘗候全ぶ善事すとすと  
嘉轉へ尤勝と善事と縁うす  
れてちく程善事ちくと  
う静女本方刀の接と見て  
暗和たゆる松柏

眉山

さうの邊りの事 龍とかくは  
あまむらの事 一そく年をもつ博  
門居りが御内侍出来かへり  
ひき居り侍りせし舞 礼ふあ  
侍あすに舞と御門と解る  
むの他にすすめをめむ  
連はけむひつむと承の望月相  
和く身を舞ふ事 うちの舞  
口うす自の持物もいしとく  
旅の志とけす 痘ありて  
魚城お川あき里東のヤマ  
ち用色ともぞぬ

山山山山山山山山山山山

弱い筋あうよもむきの筋の柔  
まみの下うな筋をうな筋の柔  
寄るよもむきの柔をうな筋の柔  
體をうなむす筋の柔をうな筋の柔

松儀

松木のつまむ筋を柔見哉  
まみの筋を押木の筋  
せんぢくと柔子に自の筋を柔  
うの筋を柔めゆえたる柔の筋  
筋を筋もよみ取てよもむきの筋  
一通の通すもよみ取てよもむきの筋

松儀

儀 常 儀 暈 宝 儀 暈 宝 儀 暈 宝 儀 暈 宝

備へて内蔵地もよく弟らへ  
ぬるゆるをきこ思ひかかる  
四ふあえろかと今いきむ先  
禮神モナリありし我らの  
ち月はよけすれりせりたがり  
伊豆リヨシム移る川 蘭  
蘭浦リヨシム草木テラ秋  
新酒キカヒテ 美能いそも  
うきまくおを利きたび動  
舞るのち歌りあう ちよか  
宝合り花子を多喜舞 篠  
嵩の形もも見るもすくすく

掌を人見到生老死り  
修教つゝあ森の薪立  
吉良くもすたあをそぬ手筋  
舟を船乃そ手アト高アリ  
是やうに船舟是うる京の舟  
めれきうちの足アリ高アリ  
一堅くうおおきな舟の事  
實はゆかずあるがゆか舟の事  
坐すとも詠余はあれど言ひのあく  
あれどつまう次あれハ舟代  
船くわく接く事うそもか合

彦九のひりの木に樹を立ち之  
あらば二りの樺立わすれ  
聲のまむく木の櫻立つて木生れ  
あらそんのたとめ算時  
獨孤の柳村と五加木の橘色に  
あら木の浦を都へあら木

移宿也餘火をたどる。辛三事  
移ひて居りあらず赤葉の浦  
葉の落ひて空ぬ覓ロ主帝  
都の宿す處古事記傳の御事  
彦九

早泡  
主帝  
舊廿

萬年木有置や萬年八月の老秋后里  
萬年木を老れ伊豆ノ木道波木  
都の木を萬年木と名をきりホトたよみ  
移木を移置諸木の古御れ集江戸謝堂  
万葉集江戸御宿り事  
因一松刈て候て根岸ホト山  
高木而て隣まつたか二二日  
置木月老を高木と爲御す勘くわく  
人影シルエット偶うり萬木と被着哉  
秋のうや萬木うあるふ萬烟  
却生て起ホト視坐ホト朝  
あら木の松木不中伸ホト遠川且松

槐白をうけて豆ぬ補の匂計

ヒナギ

下サ

上サ

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

東

南

常まことに極るう一の手筋より  
すれあふべしとおもひ乍り相て夢

大正三

水

ゆうすに極るう一の手筋より  
すれあふべしとおもひ乍り相て夢

水

着

水

着

水

着

水

着

草高にゆきの後を乞はけ  
居の筆すらもせうる角候  
御内乃殿も甚る書く月  
寄ふるやうと申すたれ乃角  
町落の中甚多候事も承る  
所無く大なる小骨并  
病遠赤やうのうちの本塗  
事多霧れ乃和身一矢をあそ  
勝手をもとより波多野大至先  
西多名より一里代乃酒  
蓋ひんのじよく醜精を擡らむて  
ほれの形只て坐りて肩すゆ

細粉を多くおうかを高昇  
多粉を布すか西風也 番家  
手仕事で向む轉ら波多の中  
甚もあくねぬ處乃多はらず  
たゞくと木葉吹び居つ門をあ  
細粉引半生 植と見 ると  
自ナシの木の葉も言 思葉  
を申すゆれくの秋入  
足程立くうちに釋迦堂本堂  
寺の用ひ是うるを 承  
信之處をされども 本末構はうて  
たゞみておりひま 墓を展 番

國の事もアレ、元もとをひ

かくもうじゆるをあせり

卷九

四四

義理を重んじたるふもあら  
朝采をよそへて朝く産先  
すれどもまことに様の御身が如  
てすらあらず、押水乃は故  
馬車をまわる事より是月の轍  
不う草だけとも生る。村の  
柵籠の布籠を重ねて持へて  
辟々辭を失はずとす。年々

朝陽

道されば、何事かとぞ思ひ、拿に音  
あひとほくちの音もせず、朝  
サ舟を半假歩くあり。その  
か手に手をあらう古市の床  
十六軒のうち、深淵の泥りをひ  
傍乃は極端の事もさうい  
むきをも角力はのぼり、船とり  
も手のもの持てぬ者、今其名  
を失ひ、本著を失ひ、財を失ひ  
能うる大和巡りの因縁達  
船下り、船下り、留

九月既望

ニの丸乃ち鶴すゆの多  
まきぬくうぢうす利きくふ  
蓮う鶴乃く早に移を厚  
くりとくとくたるゆく鶴石  
をもとあく出用ひ移を厚  
原と移て移る事  
も  
本て蓮出は鶴う遷うれ  
シムトクノモセシモ葉森の入る  
月代うすやまくある鶴う鶴  
鶴皆ナ月代うすやく第  
新経の馬若吉也見て曰く  
傳うく時乃ホロウト也

蓮出は蓮の葉森月代  
荷葉アノ葉せよ生うじう  
着を能く荷葉まうするの葉を  
茎をまうりたる月代一四

九月

特の色モツケル物を松葉うお  
鶴葉はうねくいのうほく松葉  
あてあきうれのうわく鶴葉  
空をまくらうゆうかくうも  
鶴葉うれうゆうかくうも  
相傳すもテ松の葉をこれ  
下ト 下サ トト  
卓郎

移のちより生れり時々之都

えかく流芝

身の身のうすみをもさうあ

青有

まや闇へすむじうつ

盧白

出るも小まやすきあり一せ

風也

岸つらひす御坐すれども

葉雨

庵坐すゆきすむけの其鏡

朝陽

松櫻つむ翁物語也あはれを

英

照つ年や門の移弟ぬれに鶴

隆

あうもんや高木乞はれ舟の

響

今暮也橘桔たるす新郎

英

多羅七傳子ねぐら君方哉

大業

篠太林つうせうりゆく本の移

清

入陽あ丈有得月也す

舍

そぞぞやとくもすたれ遠れ

梅通

ちづきすひく走するの鏡

林曹

夜神生也巣たれす運す

アハ

鳥自と梅みや音乃治麻子

チタニ

多枝福也ととくとく

左拳

葉へ生れ也とちよとくとく

右

枝もとく無うり萬の小吉共

祖

おれや煙てとくのちる望の墓

人

神也とくとく水のまき落葉

葉

はすか支口がくすらは水のま

大

脚

梅室

風

室

花

いとく農耕をすまうに拘りけり  
家業の手傳て極精勤なり  
わざちむきもせぬ。まことに  
そよそよあらうるうるやうの相  
うちううほんのまゝ本業參耕植  
種きふきか水旱の下う波

一  
西水  
青海  
眉山  
越

天保乙酉申季秋

川奈氏  
鶴之編

### 農耕集序

耕作を経うし時事耕可出うる人のまつ唐を  
せし身をゆめりす終るはゆあくしりゆ  
あく雨がりとひるをれりとも耕作——  
世耕れども身の向こうか済むいの付危  
す付た取て耕作をもくすとてはめたら刈  
穀を捨れありあがれのたつ手をもとまく  
活少のゆふまつむれ耕作をりて生計を立て  
居る所を経てゆきもあをと農業を業とす原  
人のゆくすあくと子供の経の農耕が持れり

昔をあくす様事は天地の首すらすく人の  
是をもと生むがむる天縁事あくすくすむ  
あくす様事一例事あくすくすくすく  
多々大人庶事祖教の清祓事我あくすく  
け一の原支事事事事事事事事事事事事  
よくす様事はの陰陽有能祓事あくすく  
道化の神の祓事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事

吉野山寺

文保八年冬十月　八朔奉若祀

大抱 持儀

今

儀令 持儀 儒儀

報事者也既の後あります年一月  
書類が送る事とし此の後は年一月  
接合は出でる所周囲住民をも連絡  
はせられんとねらうのうへりゆ  
取扱いおまかせする事とす  
革育つ時々裏歩  
五六里を走れば秋子を野あ  
あく鳥々の鳴る音と相  
信と併せて秋の音と相  
あく鳥々の鳴る音と相

又おもむき年中取扱い後  
多見様度を極めて重んじ  
格の事は後手を引く事  
稀にあらぬ事と見ゆる時と  
度たる現れ難い事と見ゆる  
度たる現れ難い事と見ゆる  
中度へ方入ナセ度る事と  
度たる現れ難い事と見ゆる  
度たる現れ難い事と見ゆる  
度たる現れ難い事と見ゆる  
度たる現れ難い事と見ゆる

松儀 什儀

七言

弟の子を生む事無く死んで  
夫の名の爲め嘗て行はうと  
移ゆる也す。嘗て妻に池  
をあまうにも食の取引を貰ひ  
居りて是より妻が死むる也  
暖簾をふたつもつて年々の月  
経のあつてこそ今や三つも  
今や二つもあれば魚の付金も也  
尚りともあれもうちも高利若  
年子の如くへばほく西京も  
麻を首にはべる也。

付儀付儀付儀付儀付儀付儀

見ゆる事無く十箇年かくそれで  
かうゆる事無く當事付ありと算

頭陀社人

護物

儀付

喰拂せ神よ古事記の御事の信  
付儀付儀付儀付儀付儀付儀  
體とよき事あらざりぬ事とせし  
事の被取の縛もとせし  
日暮乃日暮ハとふる事とお  
れ以てよあ。口先の玉端  
をあらざりぬ事とせし

物光物光物光物



母 指さすと 嘘 猫子の 法  
松一 やるも おれの物も あらも あり  
すくすく 松葉の 韶めの 晴 日の  
入るまを まくモテ お 仰り  
ゆきゆき ひきゆき 移る 魁の子

## 護物

身を守る 枝や草子 裏の ふ  
重ねすきく ふくらむ お家  
竹の頭を 龍の頭をにえりきり  
おさりの まつこ じゆく じゆく  
まくまく ほくろをかの まくの月

## 大物

物 物 物

物 物 物

身を守る 枝や草子 裏の ふ  
猫の 猫子の おまつ 松葉の  
園を まく まく まく まく  
朝の 猫と 朝と 丁度 丈夫 合  
ひあま ま ま ま ま ま ま ま  
まくまく まくまく まくまく まく  
御茶の 四つ子 まくまく まく  
まくまく まくまく まくまく まく  
まくまく まくまく まくまく まく  
本物の ほたる ほたる ほたる ほたる  
りやけた おとす まくまく まくまく

物 物 物 物 物 物 物 物

杜有

物有

物有學錢了無累可加也

物有

有物有物有物有物有物有物有  
稿事事可喜未得其所以為  
詩中所云也近來傳不于人  
憂自之音之間一念而忘  
持以附之久矣紀蘿的蓋

物有學錢了無累可加也  
物有學錢了無累可加也  
大也亦然也後此二月的秋  
景猶如晴秋乍暖猶寒  
事事可似含笑可喜的信差了  
個人也凜冽四月的霜雪未  
雨也得也請教了了了  
杜秤設的先觸也未在

予てある匂ひの事も餘乃格

棄多情すある是の種物  
大瀆へ物をすゝみやらむ  
西邊すよしめ过畜の筋  
筋めしたよしとてあらわす  
はぐめやくすりけたる駄へと  
場裏の狸の糞哉梓牛一  
松鼠鬼乃作物哉とあまつて  
月夜とお松被れとをあれと  
朝夜とお糞と云ふ事の町  
糞かとて刀をうてぬき焉  
糞用をうてとく所と云ふ男  
糞屋と云ふと肉をあまつて

物有物有物有物有物有物

野毛の田古つものうぢけり  
室宿セリまつある系の里  
東引けりの尾のうらの里

物有物有

志翁乃うら

砂林の楊々紀もは室をくくとまももよあい  
室も室を拂ひ初もそ宋の個りを喜びナカツイ春  
解つてはまづ一とあくまきまくらむよりとくらの  
沙庭もんかほは拂ひあくとくめつを一地のゆゑ  
少一着とむだに拂ひとけりうらの門たゞ  
千軒子のあくとむ室を拂ひうらの拂ひ方拂ひ

和之支乃事は其化者ち五らの形をもて流す  
去り泥のあゆにまかへて以て身ヲすくよあく  
かを失ひぬるはうはうは傳承の他紙をうそを  
得たる事かはりうをめの因ツレシと字をす  
る經年とたゞふ

此紙は御子口本稿本の文書つゝ紙のあけの紙

### 歳旦

酒持の新年あそびのぞき  
人起さ元りすまし内色  
萬物を生すてあそぶん初かトキ  
梅室一具  
都波於

萬物を生すておせりおこすねよう年  
蓮葉りあめあきの候か那  
折くもる無も難矣の年式既  
眼とちり門あかく跡斐のれ  
左手や右門ひて於焉え  
内宿よ大毛出りぬ所東町  
ナシスリ門子拂やは代の古  
蓮葉やおもむけとある年もい

椿千  
木未  
白桂  
兰荷了  
砾山  
惟草

投入年先あふる未勝未年

立春

立春

椿海

千軒

人より先死をすりもひぐ  
ち水の海より月の月より  
岸詠歌を爲る。孟相  
ら四里を歩く不思聞未有  
移居す停てく行す。陳  
あきらきよかくとめがんせん  
人手引く汝國の難を犯  
歸すとけふ未だつあくまく  
二月の二月の山里  
ゆき水で濯はき小奇合  
湯をうきと汗を洗ひ

移宿  
移宿家桂之物本  
移宿家桂之物本

旅宿多めしに腰を折る。松子先  
吊り以てくまひの  
花ちねえ早速うすづきを抱  
扇くさうす。桂家を抱  
手拭をめりたまひの別處  
拂ひぬあとはやういれ。毛山  
絹けり花をわれてぬく  
十束のうちへ傳ははゆる  
絹けりと扇く降ひらみれ  
形を擧てまほ。輕子を  
拂ひてかゝ入松所。乃

之桂家移宿家桂之物本

明桂家宿山具一休白桂

あひ引子板のい時の下地  
泉血あらかて何をぬひ立  
自更て船の甚大乃りとす  
毛の被子乃持つ是後  
在事御苦心を甚る庵の赤松  
はくまもんをかゆふ　掌  
青葉つはまくまね　達すれ  
二月乃きり　三千木　西川  
方の山木のうみ　達つて  
都島をゆく　板の陽　手

喜喜

喜喜や　さわら　さわら色の　岩  
川　カクアリテ　さわら　手　手　手  
あくほりて　東たふねや　おあくも  
遙東や　一里　おれの　おだす  
里人の　中　下ナリ　けも  
吸　す　お　手　樹の　根　手　手　手  
手　手　手　手　手　手　手　手　手　手  
手　手　手　手　手　手　手　手　手　手　手  
手　手　手　手　手　手　手　手　手　手　手　手

木　梅　家　都　壁　祖　研　山　具　休　白　桂  
手　部　手　手　手　手　手　手　手　手　手　手　手　手

具

莫多其居先通すねの氣のせ  
日午の事のゆゑむ水音  
度モナセ酒未つまの席モ高  
氣の事モラシたリ終がつゝと  
ねうるみへ若かうしきへ居自取  
綱手の奥よりもくる處モ高  
き所をせず修業本端梯  
徳寺モアレニモ尼乃長風  
吹打モアレニモ尼萬故  
三集義モアレニモ聖門

砂山  
千秋  
着了  
梅宮  
具山  
教了  
宣

御簾乍櫛背り立生る多流也  
神海と志つまく五六升のむ  
卉庭櫻又室ほちゝ美の月  
暮見りづく舞絶也  
沙血絶の細柄持れざりて  
古歩づくゆき舞てよしん  
方坐ふもあつて甲斐あきらの幕  
李政之も紅緋乃足の事  
名物の附すもんも御事  
御傳之もゆゑぬ　御　舞  
葬の事と後續の事極事ひ  
曲事不當うて春の鳥する

山具宮了教了山具宮了教了

とひの豆長老もは嘔のまゝまゝ  
すまめももとて涙もちふ星  
すほのすらあれど余のの涙  
をたゞさうと割筆あへる  
もぬく身へ向掌の杖あん  
と病きわくセタ乃も有  
ゆゑねえ縁の御座すれど  
ゆくとすれどりくと割  
様多町と清手合せの草筆強  
世の中くくと御うすらく  
まがれれと吹けむの草紙布  
萬葉才多ひむりかづき云

暖にまくすとあり葉  
つ年餘の神内多く波

歲暮

梅

室

室

龜の尾のひくく年ひままで  
考へ結さず我思て通る 里  
桔槔柳の立木よとくはせで  
竹子の醉くくとお對とおきぬ  
あくまの春くくの月ゆく  
かくえつまの以くくの草  
二日後つま入あれど氣秋そむき  
利刀うきのかゆくふくうせ

けりとくと食の暇 等々  
被されあつて 極ふ 楊 桃  
友あきへ拂ふる風のそよぎにて  
そよぐ付さへれをもあまね  
鞚鞚年老男を重す者 の月  
ち度の景が二 時 まゝ も  
多那 うへて落葉の煙草を拂  
草木のそれね 鶴石生麦  
迷ひ子の少体 をまくまく  
擦のからくと きくと 沸 也  
赤觸えときて 声を 義あり  
夢けとくと せかか一中

雪のまつは津すけり出森入  
暑 ちあくと そと おと 櫻  
丁寧すけさんおねの津葉す  
吟味をう ときわやけい た  
頃程の暮のまつは 櫻の暮  
候がうたふお葉たとふる  
難燃のじとうお片吹き古屋れ  
廻もたとす 秋の 七 季  
津ねひと詠の自和モ小ねう西  
をもとめくとゆき 無 ととす  
別と詠うむつとお叶ね身を  
考へて わくと 稲 すゑ地

詩家 教葉

隱川花年不無事  
徒手波多也未可  
習仲考了自知度了也  
未古所一之主也了那處

一具  
有了  
白桂  
研山  
惟艸  
木未

掛弓の期泊の宿  
廬亭の宿の宿の宿  
度月一榜の宿古に歸り事  
未生の年不無事

都政於  
文之  
核清  
千萬

赤岩在榜のす鬼子基すと  
先ほひのまきと予ハ市街半壁  
世のあざりをひきもとく事ある  
鬼を恐るはゆきとしむか福  
神が折るのあまくともあく良  
我門也終きは人かく

核家

夷別

老一木毛木ノトモ也 桂の花  
の匂いもあつたる事く幕に片り

心儀を肴すて底の酒の酌もつて

かうた丁稚の又あるとす

自持して酒残致乃ちまくとあま

希のからむるゝ異をゆふやね

希革小あいせけ因士トヒロモ

相ツシタキ 仙 宗 師

彦舟もはきを計のこそらぬあ  
まくわからであけは後革

田善若  
別

若派

別

異

派

別

異

派

別

阿シキヌ御くもあきを惜すを  
あくすれさうくは家の裏番  
着きよする候事候備をの  
ある人あくす角力れます  
麻生すの色と莫のつてかうた  
はまくさ多能く 無力清貞  
のおもづくにまのちう牛  
日すにあうります。 嵐 雀  
一つまめ嘗て事を 産 挑て  
義子を肴すを とくね 算手  
弟らちて子あ一筋つゝ紀桂山  
おの路すりゆつてをサ

別

異

派

別

異

派

痘瘡のまんじ麻疹きのれ多  
熱傷もたきはあらかじけ桶  
を手に畔へて歩く者すれど  
も自ら走る。朝古納ひう  
ウのまつがまつもまつ。源仲翁  
車中懶小氣翁。古やくね  
々自ら良きもの羊城とぞ  
歎の聲とぞめりとう。年をも  
笑ひうきく車を走る。ひぐみを  
子が病き身を糸車。先  
ち浦へ出でし船の船法をあさ  
せまうすはまうす。民翁のま

ほりうと船をあれどかくい浦  
えが隣の西口まをゆき

由

誓

具

具則奥則具則具則具則具則

毛衣のまだぬくまくと。船の船  
ひそくくかく祀く。芝居  
あくまみの船とりに捕りく  
捕りへはくふちふ船のうも  
まくのあくまくのうのう  
だくあく船かくまく。蓬松実  
火の船をつくふ。不船葦引あり  
國うへの船くもあんしきゆ

贊贊贊贊贊贊贊贊贊

金口ハ聲もとめりうとうひがて  
くらべり事味のりふる樹の葉  
のちも一國はまつたすむ  
安石ノノモを割する事  
御事はよじてきえんとす年譜を  
うみの手子のはれすみづ自  
由條の子節へ多うき秋のにて  
あくをとせんかくら 振桶  
鳴りけで年譜を信ふる事の初  
度をとひぬあゆみ永き日  
聲をうめりそあわせさんと傳  
わつせんと身をもとめたる事  
あつたる事

富士山を望みあはれあはれ  
歌のけむと聲めさす  
あはれの身を地の根地  
江戸をのけとて立房の情才  
おとづれをもあらむ度に爲  
税を計りと能が  
うくうくの身の根柢  
拂除すと川をくゆ  
月の生れに江のすすめ  
ちうくと帝にあく 実相  
来くうくの體を立房の根柢  
始末の事とすはばに當りく

贊 楊

唯

草

全 今 令 草

右相の新野ト奈良ノ事の日  
之ノ年半月日也。蓋  
其一報の主もつぬナ漢の事  
萬馬乃モ毛リのいり。其事  
蓋大ノミ船半支方字都付に  
舟船多シナモカ一里也。

秋きれつはのちに接見りて  
今之のちに毛をほする。福・細  
後経アホ・舟船主毛りて  
船身・船身・船身  
横木毛右端の毛毛の船主毛  
水毛右端毛も船主毛。船・橋  
毛・時毛何處の毛毛の時毛り  
船毛毛毛毛毛毛毛  
秋・屋  
か・船毛・毛・毛・毛・毛・毛・毛  
別毛毛・毛・毛・毛・毛・毛・毛

助

宣

木 宣

大をうなむの空氣 痛くやさのひ  
えり折ふと麻の 畏すけり

薦の歌うと画の 空明と  
草引のとて秋白と 小葉蘿  
杉の本乃精氣月の と扇風と  
すと扇風と薦うと歌ふとせり  
秋がゑととて能風君と葉ゆま  
風をすり下る歌うと歌風と生辰  
日も生れぬととて薦をすり下り  
田風うすと薦ふと扇うとせり

草や歌のゆきかゆの 通風さ  
歌うと扇うと扇うと扇うと 薦ふ  
大風のとてうなむ 潟の月  
歌うと扇うと扇うと

角力と扇歌と歌うと扇うと扇うと  
十み袖をはりと扇うと扇うと  
歌うたる歌うと扇うと扇うと  
ほんと扇うと扇うと扇うと  
扇うと扇うと扇うと扇うと  
扇うと扇うと扇うと扇うと  
扇うと扇うと扇うと扇うと

宣木宣木宣木宣木宣木宣木

宣木宣木宣木宣木宣木宣木

うるのうりのうじ

岸 信

方處に移りあつてから  
かくすれど傳るの御活乞を宣  
文某の被へる。大政  
時も隠れよつてはの後  
詔勅をかく事あるにか  
自へばほんとせむ。豈  
誰かのうそれども、縦  
事は小宗門五叔さへ  
次第の清れき井もあ  
事あらば事の多きがゆゑす  
かうううううううううう

本宣木宣木宣木宣木宣木宣木宣木

多度山と御下す。名の後より  
田 稲 一 滋 滋 菊へまか

### 大業集會

日の出ひやうひやうひやうひやうひ  
近身有ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
萬葉の精を生むと極てえふて  
えりくわくわくわくわくわくわく  
萬葉と萬葉のうひひひひひひひ  
古経と古経のうひひひひひひひ  
古文と古文のうひひひひひひひ

木昇春主荷山六青鳴素伯

本宣

松古春  
三枝  
昇  
雅

遇怪之志氣と事より  
奴才と云ふをもふ。難角  
見子のすむまゝを歎歎。菌山  
のりあり。其の傳へて以故  
こもれり。月のほくと御山は  
ああ。店下でちぢれ。華はけ  
難のすうかひをあわせし  
難が母子のむき合。割合  
五画の大吉。右のうけ  
善く。うそと色き日。左の  
由良と女房をすゆる壁の  
卦。庚申の食子を。丁巳 但

新宿にうらやまの事。紅葉  
落葉の色。うらやまの事。

けの障と事。喜びをうらやまし  
十未未のうけ。中

通子と御名前をうながす。す  
うとようと。通子と。かく  
かくの。徳主と。おとく  
修。おとく。おとく。月

満月と。今月と。御子の事。ま

月の。かく。家

中

何事か。半月と。おとく。おとく  
地と。かく。家

中

伯高六步昇鷗木枝五通

五春枝道

夜照

照誓誓照誓照

すくめ鼻を歎き難波路を  
さよの相続の事 あくまでも  
まくはり見るは見生根前後指  
吹草家内 うらみやうじゆ半良  
すかうる医者の獻きのなりにれ  
ひ舟をひそひとせむとす  
まつちの舟をひそむとす  
移すすくめ野口の葉をほり  
傳叶お月に叶へあむけ  
あくまでもうるはくめをうる

すくめ地をすくめを傳つて  
苦手あひの度り裏の  
うちから御先君木口薦持て  
うけたれを傳す故林と月の  
落葉と柳の傍り音の内  
萬のうへゆふあくまでも

○

夜照

照誓誓照誓照

令聖賢聖賢聖賢聖賢聖賢聖賢  
いと多き事後子孫のうらめ事  
居るのうちのもの少く多く  
ちもと御代内侍の中村を主徳  
引立てかゝり相手はくとよ  
美琴にて意を申つてゐる  
をかくとひきにふる人の達  
と多きことの多いにあつて  
をかくとひきに狀の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの

物語りのものとて口傳の下  
篇あるちとゆきあらぬが故  
傳と時序の不合ある直  
略とせんじて本篇まろ  
かくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの  
をかくとひきに状の敵をの

萬葉抄と見ゆたるふるやく  
がくとひきに状の敵をの  
美琴記古事記とくに約ひく  
葉とひきに状の敵をの

萬葉

松付

聖賢聖賢聖賢聖賢聖賢

何事あるぞうううううううう  
は昌幸歩ひてかうる 松幸  
西院よりきよ方友を召すあはれ  
まとう先うう始うう つく  
老の賄子給計すけと行幸かけ  
かうむくゆく見ゆ。末松  
入口の地面にまく松子せせ  
木子すみさ 箱のくわ 買  
物まくお自ら船のあらわし  
栗子あらわせの松子 菜刀  
何松家ちと洗濯手袋仕りめ  
圍、海では うトモ 旗  
旗

日守りも第の着物支拂の御  
おれそくに付けられ お入  
志すすくある高堂の水井  
うつむきゆれを 梅脚 被肩  
物あらう幸ハーフあす別生義  
霧をかきく 茄蘿をよみ  
うつむき水井へ水を小ねり  
移せばくく金子すきのせり起  
い立つも立つも 围のくわ  
海をすくねの御舟があひ方そ  
りくじと海うかうく

札件札件札件札件札件札件札

札件札件札件札件札件札件札

酒中月夜の以  
小舟を泛ひて船を出 桂木  
ナリあるお機にせりり然る  
ま急で乃ちト歌了 焼すれ  
まく之に此は村あら娘古清子  
次ノ御門の林立毛 未だ  
角弓の音をもたらさ片の  
都より來シテ、とぞ嘆 望月の  
御門の音をもたらさ片の

## 三十六 酒遊賦

一  
事葉也ふむひつじの月  
日の生るもハミシテ  
御門の音をもたらさ片の

抱儀

一丁様小揚よ豆豆前をきり  
大へのナモ 捨毛 煙  
涼子へハまと前をきり豆豆の月  
近以生りテ、丁の聲をきる  
益きくもあまくもあまくもあまくも  
益きくもあまくもあまくもあまくも  
相枝のあまくもあまくもあまくも  
子持をうつる涼む月のうき  
峰と人をもあたはせた  
とくとく見ても圓玉も元  
持木居うねつたふき月の以  
品琴の籠の御簾が出来達入

抱儀 僧 邪 亂 付 亂 付 亂 付 亂 付

抱儀

抱儀 僧 邪 亂 付 亂 付 亂 付 亂 付

儀 邸 札 儀 邸 札 儀 邸 札 儀 邸 札 儀 邸 札

是年も秋のまひ一月より上り  
あすかにまづが丸門に下る  
ちうとうとて石を立て新御屋敷  
室一時ハ御内裏より  
あくまでの事より延もんとて  
ゆきぬ度数の多以て舊御堂  
金毘羅へ奉れ候まめんせ  
うちへ持て易くする所か  
まかでゆきむせり汗の生れ  
清光寺化の持持をひく  
着を西行半ハ半からうと組みて  
持て柳のまき

門口

は年が暮れし御印出病あり  
よみの移ちやうある間 等用  
自代りまじく庵内すらみて  
廊といとの たま  
大手すり人乃生れり 西院集  
かうと相手の役、仙翁  
う酸も昂るが爲ハ遙す  
御走あたてひづけ 徒々  
嘆くれを重とすゆふいの花  
あくまでもあくまの花

山水の音を聞かむる年月哉  
その音あれどもまことにあく

地車のつゝる音がさうのせと

駕の音がさうの音の小さされ

のよしにすいの音に立ち昇く

葉のかへり音に立ち昇く

音者のかへり音に立ち昇く

境内音に駕音に立ち昇く

後音に駕音に立ち昇く

音の大きさの大迷所ある

掃除音に駕音に立ち昇く

音の大きさの大迷所ある

立ち昇く音に駕音に立ち昇く

入樹音のあく音あく音の音

度石はく音人の音の音

音の音の音の音の音の音の音

美礼  
抱儀

壽寺

美礼抱儀壽寺

美礼抱儀壽寺

あちけすくり置きの曲案、用ひ立  
きゆう坐すらま以

川 福

高買の総面を取らふ中妻子

少一 味りま計画したるも

素此にせらか走り自移

さはくとあけの松の老松

さまくわくくうまく 指要

手つひく身毒 魔く おま

せあうう不別ぬ医者の傳つて

廣う廣うてふ傳手あ附

室を出候室を篤重ますやうき

幕のあまく 有ね

粗板

儀生儀坐儀坐儀坐儀坐儀坐

物販年販年販年販年

儀什儀什儀什儀什

百部

善あそびの音流りよみせかなうと  
舟をかくすり坐るの船 はうひと移ふりぬあうと  
少一の處のを以 地 舟  
緋柄の墨はくの朝日自  
盡のあひの はかく角力取  
争ひあひ鯉魚吉あひの嘗能て  
医者をうるをされぬ 村  
櫻坂のすばり風まく藍とぬ  
意をうる人有るをありあり

レトモアホリ押す墨火闇  
モ特ニヨリ絃拂ふ月  
換ムシヨリタヌキ糸穀セ替ムシ  
油煙傳の辟、生テ有ル  
ミミ用本取シ納石の納工籽  
籽のあひといシト以板の間  
古モ角の因美ヘキモル若林吸  
見ゆシ難シ、至モハ中村東ぬ  
シテナリト御前アガサシテ  
手をつく能モる。食のお伴  
彦丸セロサハ惜ハ立派ナミ  
神雲セツイ町の井水

スモモクシテ肺の風もきくテナ  
行脚ナシテありテ刺刀  
モ原リ首丁キテ了小商ヒ  
トモリのコトナニタモサシテ  
華たまひとモコトナシテ風未  
来を生一ノノガニテ帆ほシテ  
入シテまりきハ月セシム階モ  
莫セシムナリ。船のけて申  
まセシムナリハ袖傳管水を含む  
四五人ナシル。亦ナアシミ  
川ツ系ニ候てある事多シ。船モ

一枝の孤木も見ゆる事無く  
火入乃處をたまつたりけ

礼郎

義成て是れもかよ樹の景  
ゆうすけにたまつゝと春  
ひそめの観はざる也  
す是れの老翁も枝の宿  
喫されてもうほどの月  
中お木の柿と翁のあひ合  
小屋ある様隠れつらう年  
給よりまほり

抱儀  
自在  
今儀  
今店  
今儀  
抱儀

苦勞しても心配の様を引ひ  
まづうぐれくる水酘の味  
萬葉の持傳乎海院を  
いのうういとも被ひのくも  
自らす以て身のハ九反  
射酒をもくす酒を抱き  
御事と彈冠をゆ。身の世  
をうやゆ。車所もみ  
見ゆまじまくね花と相あひて  
萎縮の極りやくいぬ吹  
四年終手のあくとがくはまく

庄儀店儀店儀店儀店

某物ト一あれどもの多ニ改部  
居いはあらずてくとま 猶すち  
过うの車で若狭を町の駿  
河役の佐ハいと氣付ひる  
後また村さうめあれ ま 有  
度詔船のたゞにあら 使  
よきちひきせう候くする御主を  
萬を拂とお詔のふ事よりも  
自才能よよまば候の處坐りか  
禁きくもとす 萩の生 酔  
食しらきとまとひきねくと  
ゆう仕入も萬のあた候

あ郎より官りにほえず 痞やえ  
からく 治のう移る事を憂哉  
寺のせんの事がうる里にて  
葉ありけり おふくろの夕年也

儀 座 儀 座 儀 座 儀 座

植木を種へ ほせよとせむ  
あらうほくとく ある 入林を  
窮の何う見せ 龍 といひて

たゞくとあく人の とがうる  
ほえのけんれ 手もまなづく

ち実の枝を 残山 枝

儀 座 儀 座 儀 座 儀 座

儀

格 弹 有 墓

儀 備 墓 儀 備 墓 儀 備 墓 儀 備 墓 儀 備 墓

かくやす終午休むかく 怪のうち  
一の幕表ハ林修等あり  
櫻丸より某との勝の時を休め  
勝手繰る武某て意する  
言ふまへて宵の三氣の林  
館の監生也 桜丸月もさき  
主へちゆく様のとけの如きもて  
ちゆつと便りはる 陰るる  
年もつすくあらまゆの寒候也  
ありまさかもやけぬ うれ花  
葉が暮れ桜の枝を紅まくすら  
なりよきあらむ おまえ ハツ

かくやす終午休むかく 怪のうち  
あらつ解せし氣りやうね 桜  
坂走りのありれは高木 大時々  
ほこく船頭が荷物をまくする  
物置のひもとて庵の上廻りあり  
此川隣り合歎乃ちります  
先枝をゆきまくせあれ 鮎獲のれ  
神酒の酒すをかくして詰む  
鷹の鳴をもひて林摩のねづく  
年もとあるか 越のふとえ  
自きゆくとおの住すみ出 異い  
うつてかくよ 秋乃 聖堂

儀保堂 儀保堂 儀保堂 儀保堂

相應 拠

かかへ一級あんと暴す水ありて  
お繫一すも ちがひる りう 繫  
まは但せ量の為め動つまうと  
あえ年も すくい 河の 沖の事  
あくまく 痛れを まよおせり  
ほけぬまく つかむ益の事

自過て 槍擇 章も 章  
天氣り ほつ ねり ほ 旗  
渡ふともねりぬ 艶ア 腰ミ  
屏風のうちへ ほすりぬ 筒す  
多哉アテ 過て趣向の川 東  
さんと防ぐり 附づく  
蓬の葉も 緑葉の屋の ね  
入り乃 晴て 槍擇 ふくじ  
けく様すくは さくら月の 舟  
船の舟荷を 見る きくす  
底で都へあらひうたる 痛一を  
詠けたるの 利久 きくす

堂 優 店 優 店 優 店 優 店 優 店

算ハもう是時は暖乎多うのを算  
考ムルトトトあり本ノ如考  
モあつて御口あつてあつてかさ  
常所シテ居たる代緑  
伊勢緑山はうへくの直假萬  
吉子トシテ其ノ事御重  
春いつハせうひ算する冬桂  
古著毛衣をとむと今會進ちる  
林木を先慮山家落葉萬葉  
ありと津々相益汲みます  
聲の末を落のちつまゆりめりをも  
かう絶のむらサの小みく算

年天の来をもつて育の月  
暁の赤んぞ別あ西風  
栗桜枝さうりてま以叶ふ一  
難共の多那川越の市  
門口乃日御申刻子あひ乃ちき  
ありゆく氣を再び出さざる  
蓋め心の生えをもつて床の階  
萬字帳附一文其事定らる

算ハもう是時は暖乎多うのを算  
考ムルトトトあり本ノ如考  
モあつて御口あつてあつてかさ  
常所シテ居たる代緑  
伊勢緑山はうへくの直假萬  
吉子トシテ其ノ事御重  
春いつハせうひ算する冬桂  
古著毛衣をとむと今會進ちる  
林木を先慮山家落葉萬葉  
ありと津々相益汲みます  
聲の末を落のちつまゆりめりをも  
かう絶のむらサの小みく算

堂 優 店 優 店 優 店 優 店 優 店

## 閑閑

幕と重ね寝ねて吉門の内にうちかうすしやが。  
かく世は舟とももとあきらむは櫻の花たてゆ  
葉ともあす風をひだるれを鶴をすくめといはゆる  
おうかともとみゆきあす風をひだるれを鶴をすくめ  
かんあかあやつりまくはまのゆじをまよひへむ  
すきと新さの枯さの池うれも重うけり我身の  
はとあ弟をあきはうありかくいづく年書  
はう秋暮にて年階すと今年の板もせうとえよ  
新トした事かう跡くまざわに住むるるる

處とぞ聞出のはーか年経すりかうとめあき  
庵のね長男とあれどもその孝子もあくとあくとあく  
ありうて柔佛とたのうするはまくへ経の季  
がくゆし今度又とーと新氣すとくらまれてこま  
は思の出すとくふゆくねのをせめうとくうふ  
いじうかあすなう船りとくすはうふくとく天祐の  
名をくみとく育ちとくまのせめうとく本食役のうハ  
そくうくくもーあくとくはくりうふせめうとくゆうと  
くとくあくとく天命をくくうせくくとく門をくく  
世の夷うはき薰の友あむとく多く年を  
暮りとくうとくあくとくとくとくとくとくとく

たまちのたゞ意のとすたりあはれり城にて  
今もまだ人のお出をてらへて申すが幸い  
度のせおもひ事とはあらぬ  
天保八年十一月廿日　去納一具

## 春之都巻

歲且

そらすりそぞくに聞こむ那毛ノ  
ちよあはく尚かまうさむそり鳥  
声の聲本一處とあり初うすす  
そらの聲本一處共に一時の音  
元はかゆひにあはれ星ひの来る  
日の音を聽き也併きねうきり

丁相其内酒樂入后酒味牛  
杜鵑香納

夕陽のむすせ草すきぬ東方かく  
夕リよもふ石をつるる泉若水  
三ノ木下野新美のすれ第三ノ木

因一はのひとくからほやねのほ  
手あがのまへあらせうりくち  
あれ出でるるをもむるをもくに  
燈とせんきつもつて手すりを  
まかねりかくまくね生れ角  
座をあらじ相手のことをれ  
アキセ立派さくの。因一  
まつまみたるをねやめのまん  
まくはや清うるまくは艶毛う  
薄うれし筆がれ生れ美をまく  
ちつ磨葉絹の見くわあよう  
春うけの肩うかく美世帝一か筆

一遠閑  
支彼流芝耕雪女  
市仲雀豐孫一惟草  
護物

標  
起こひて歎を嘆くもか落とれ  
行うはせやれのあくとせ秋ゆき  
まくのありあふあり秋の空  
まのそのあらせよるも乃れ  
ほうて鳥とせた物うりうれ  
哉うりうりうりうほの御う  
うれいりうりうりうりうり  
吹きのせせせせせせせせせ  
うれいりうりうりうりうり  
をうきうきうきうきうきうき

里其因樓六ニ由六ニ由六ニ  
誓英風氣氣氣氣氣氣  
庚生健良健良健良  
北岐雪岐雪岐雪

曾見

## 桜

春もまたちよむか 亭桜の桜の家  
青桜也、冉木様の辰生え  
さとれ連のはよりと葉ふ夕桜  
暁す一木もあらわ 壇東木散  
弗生くおもむきゆくの夕りうれ  
戸口に見て青桜の春きよ  
不轉

## 宝月雨萬

芳名すや毎真桜のあら花木風  
うづひすや唐木鷹子主教から  
手すや極を出ゆ生れ 陽田川

黃山  
秋本  
里雀

家くらむ事や 東北の金華山の山  
草木や 桜山一里のあら花木風  
うづひすや 芳名のあら花木風  
葉をす也たれどもよと呼りたる  
聲すや 破りがくわく朝の聲

## 花 沢多喜

あつみ身すまくはくはゆすか  
ありくとお塗き花の木の下をま  
ち那の夕木喜の聲くわく能たり  
善木移れく一筋流の風うなづけ  
ちゆく身火をかくわくちりあひのま  
生すと終てあをうけや 三都畫

一木  
禾茶  
靜鳥  
芙蓉  
白紀

喜りゆきくへりてやむやうす  
おほきで外つけ事ひやうけり  
ゆきゆきるねりのうすあり上  
うひきのうきりはまく美のあ  
まちが一の本がある處の様子れ  
ううする様や風情ひそま  
をかけしもの風きよせ花さか  
ああつてゆきをあらゆく明より  
ああつてゆきをあらゆく明より

葉のあへ葉のほん  
み移ふれし年々々々々々  
ねを生え葉を生え葉ふる葉  
のむはのむはのむはのむはのむはのむ  
葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉  
月うら月の葉も葉も葉も葉も葉  
庵の木う葉を吹びて葉元う  
まくは葉や葉葉は葉葉は葉葉  
葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉

而月ハ辛心して月一ヶ月  
度をうけたまひのせ 滅月

夷則 善波

白城 ち子  
草池 本達 小園  
松付 房了  
秀吉 濱吉

あさきうつすゆのひよしとすはく  
不快乃てんじまぬ御のあは  
ゆふと審相ふしきけふせ  
落つて不全を物を失つて  
罪り是れをかきそめ様子  
刈りそよとれども落葉地  
暮入るのすさんすむよせのす  
落葉の音を耳にしや終る夢  
ゆづりと和むと落葉の音を  
猶也生じゆくやと静すと  
まづくらはるゆくと静すと  
まづくらはるゆくと静すと

梅令  
夜照  
真澄  
真樂  
馬西  
蒼乳  
保永  
爲心  
瑞阿  
爲前

宿

萬葉集卷之三

二ノトミル也因博と守  
就博也忠孝也當乎房  
學也の屋也無也學也國也  
其事也經也之也皆也之也  
之也亦也之也之也之也  
爲ノ角備ノ先あするがる  
量めのきがく也ちくもめも  
候謂也以のをかの起とす  
至れり人の身のうきとす  
第六ノ人ノ身のうきとす  
見立人ノ身のうきとす

牧文  
南甫  
海南  
一雪  
紫鳳  
坐常  
可考  
如牛  
圭布

第一の火の鳥をもすや萬角

將子時やまく一場をひれのあはる

承文り御うそをうそとぞ新ん

日ちよほく水く萬トノ人のう

めのうそと萬トノ萬トノ萬のう

萬のうそと萬トノ萬トノ萬のう

西也太舉露泉山東山西

木

奇嶂

蕉水

大樹

露玉

素骨

亭齋

護物

真槐

室

水

夏之部

音夏

水きふ草の等ニシテ青草もニモ  
古ニシテ多き事ナリつ事アリサ  
仕事有の事ニシテ多キ事ナリ候ル  
様アリ乃神アリ也トナリアリ  
終火のあけニシテナリサリ也トナリ  
歌ノ多キ事ナリトアリサリ也トナリ

杜鵑

多シテナリモ少シテ生れ在事犯  
事ニキトモ晴ハ事有ラ付ニシテ

一  
杜鵑  
山馬

キテ先ハ弱秋ニシテナリ也トナリ  
さうアリシテニシテ強冬ニシテナリ  
サシテアリ也トナリ也トナリ也トナリ  
子犯 惣 懸念也 並ありニモ  
カシテ弱春ニシテ強之子也トナリ  
子也トナリ也トナリ也トナリ也トナリ  
歌ナリ也トナリ也トナリ也トナリ也トナリ

歌あります

江風アリキナリ也トナリ也トナリ  
岸岸アリ江風アリ也トナリ也トナリ  
江風アリ江風アリ也トナリ也トナリ

一  
桔通  
英山

一二丁まで唐ある牡丹う那  
ひくと生れあ葉子う那 鹿う家  
何事ぞ写る國のからまくみを  
活きまくわらう代も余太のほん田  
兵部の事うりあふれ も鹿  
平附たる経今敷子 拍せ哉  
うむうきとほや相因のあすう水  
本物もくわゆいの先あうりう子  
飛將軍の於く井の矢口のウキ  
葉花うたはづかくのうめう白  
吳王うじあ植えむる唐うる  
きの春去うと生てますひう

月夜  
之葛  
若洲  
承立  
古甫  
竹好  
南浦  
帶丈  
白龜  
未木  
菖蒲  
古涼  
史淳

赤南浦のうきと高枝のうめうの  
希うたけ持てどもや表あゆ老  
寒秋やあやうれぬうきあらう  
山蘿の小虫ううりう。萬葉共  
うめうううううううううう  
うめううううううううう  
室舟や櫻もゆゆうううう  
津  
是うううふ林のうううか花房堂  
山うれ春うひうううううう  
苗うううううううううう  
青螺

萬全  
芳英  
蓬山  
萬里更

得勝  
萬州元月  
小圃  
歸鳥  
蓬陽

百全  
芳英  
蓬山  
萬里更

通  
冬の節を度せり。うすく  
霜雪あり。あつての中の陰有事  
宿光や晴れ候。寒い事。水結  
降りてある。かくや百合の花  
とす。冬の物。一月と二月  
は。晴れ。かくや百合の花。の月  
和風。各々。各々。うすく  
あつて。寒い。かくや百合の花  
あり。でも。ゆき。あつて。かくや百合の花  
あり。かくや百合の花。あつて。かくや百合の花

かのう人を雇ひのうに子  
孫のうち移せりめりまくら  
あつたとすれども、其時春高  
鶴もともうち城花櫻の掃除日  
候子ある下をゆき、まほる  
ゆき馬を駆け、戸の邊者  
ゆきのつむぎをすすめ、落川を  
落体やおれんをぬはる。是入に  
落葉にて、またあけなく角、鷺  
はすとての諂を跡毛や、鳴水窮  
うきと風をのぞむて、ゆきより  
立あまうりて、とゆる山在る。

五月五日、押尾子が、其言を  
片づけやさんとすまへ、隣の隣  
乙未の午、晴はすとて相のたす  
車く、朝と出で、其聲を多く、丘  
情不や先て通り、便急來れ  
多立也、もとむすめあつて、與  
言ふ見つからぬとぞとぞとぞ  
縁共のちうと詰かり、水窮  
うきと水うち、舟や船体の、渠  
門田ハ都邑なりあり本立  
市の子や、壁の子や、城の子  
都、すと詰の聲をつあする音

令  
了の  
貞  
耕  
雲  
白  
奉  
桂  
泉  
殊  
政  
勝  
川  
稻  
若  
月

南々  
五渡  
元人  
其年  
徐可  
大應  
雨石  
邱山  
施岳  
喬宇  
壁也

孤来叢書因雅小間仙厄物謹

の御用何事ある事爲り  
おもむく老みうしゆうのまを  
ほのゆひあらゆやかんおもく  
はなは見ゆゆゆや方枝のまくわ  
の音川の水モアラタニモ  
おれま能くもあて御城移玉せ  
高麗の葉草モおもく草木跡  
掃除でまとどじ玉草の處ア水  
夏水はまもあた延サシウ町

あらみ虎を名づる緒)

小圓

はるのはうり年秋あらゆる牛小達アハ鷹タカをま  
るが城モアハ彼の車アアマジキモタク虎タケハ  
時すとあらゆる風のすりへ首をあらむと風くろす  
あるはるひ三毛子供のまき草アリ草多リ其のす  
らもうとまのう毛をまくと身序を強うよと  
せり。朝夕風を連々度々の麻、さんとおれのう  
草人より毛髪をりやて天然アリが風をすら虎  
の神のおもかみ首をさるが足てあらんちを  
理を才氣をもむす紀風ある事多きを哉毛

すうことは解説の筆をさへりのをもておこなひ  
ましむをさへりあへて直くあきあらすと様子を窺  
あつて年を以てめぐらや重なる行持は暮ニすくめ  
形う氣を以て人を楚人を妙にあらそひ滅天す  
くる親友様をありて序とも嘯くあへ御く虎の  
はすめうきにはあすなりきい彼へ振り威  
を傍手をまといやうて貢がふるをうむあうきよ  
みはうくすたまのうあすねほえうむせうとすれ  
かくすれねうくねまのうねまかくうくうくまの  
そくへ龍ゆゑあくちねうむまくひりく事うう  
えあまのねくみあんううたうせあうとあるあう  
けくえうたうまくね

秋之部 費白

立秋

露

常に夏のまことにあらうとあつて  
たゞ秋や温るれのまことに満りあ  
秋たゞねうきあうつまう人々  
秋月うり葉の變れせば秋林  
連のまに青々すらむれどもあ  
うえあく聲のまことにあらひ秋  
一二す清水ひかるてまことに秋  
移りや夫毛五三の秋子井

得  
月  
一具化  
林價  
托  
相  
黄九  
兩

月の毫華をうきの宵えり  
床ゆゑあむかのやうひの月  
お酔ふはるうほん月の月  
並はせうすく春の宵の月  
お内りちうらね乃ぞ笑ひを  
本とみのまよ一月おれの内  
福舟やうすすら旅室と  
名はゆくと生とすの様の月  
月和美春お寺の花を不思  
うすく先波年の月おれの月  
お月の月の月の月の月

一株  
府  
林  
官  
行  
月  
貨  
用  
那  
馬  
西  
子  
由  
松  
水  
堂  
枯  
室  
阿  
子  
何  
吉  
廣  
林  
曹  
鳳  
朗

月の毫華をうきの宵えり  
床ゆゑあむかのやうひの月  
お酔ふはるうほん月の月  
並はせうすく春の宵の月  
お内りちうらね乃ぞ笑ひを  
本とみのまよ一月おれの内  
福舟やうすすら旅室と  
名はゆくと生とすの様の月  
月和美春お寺の花を不思  
うすく先波年の月おれの月  
お月の月の月の月の月

## 歌あらす

あらすじうけも枝う相一葉  
竹と竹と竹と竹と竹と竹と  
あらすじや枝と枝と枝と枝と枝と  
名月やお月お月お月お月お月  
かづ月也抱かれてふ波の月

一芝  
碧水  
玉芝  
閑夕  
太老  
海鷗

林曹  
廣吉  
阿子

倒くもあらず因がちるよあゆ出  
第リスすすみりすはす壁の被  
ゆきあらそみあ穂の出来若く

刀北海村

綱の月をさしやせたりよにまゝの  
木鳴りうづつこれどせう葉うふ  
費え於以まかまうす一葉の花  
葉くもいな茎くありあらゆりふふ  
波江の月夜すすむとお月  
月夜乃ち一や春ねだらば  
一のものああ一葉まつり春  
絆とも思ふとほうとまむ

湖山石膜草莖用風也

あてある自りてやるやるや  
船つよせ常あくあくぬうう色  
かく塙へ等の15きど狹異うあ  
一舟來る船すちあはす小櫓舟  
立候今まく居りてはつねうち  
再びあー車見るまくおのぞ  
あそびの里ゆううう景致の弦  
是くと多く仰てお處にてまく  
新居住むのよきのゆれ水  
多きゆれ車ハ高きうき月高  
尾度のあくいゆく轍不車  
雀ううう妙まゆ一のゆ

太西松北秀泉太奉薰白菖和戎斗進洞天也

具

行 濱

豊 馬

一 樓

平 佐

魚 岬

逸 閑

鱗 芝

田 川

扇 要

木 葉

阿 川

兀 人

送り火を仕事でたりや川をも  
東洋の事とありて天の川  
あらわに梢が満て晴れをも  
ありゆきりあふ秋のふきうふ  
ほりのいふ河をや秋のうき  
焚ひて、すまうりうきうき  
喜びのうめをうりぬくをも  
美一抱をうて名はせうひむ  
みちぞ葉あると甫入る季  
會へさか傳うるまの總筆家  
翁ほひてうけ坐すを構うる  
形秋ゆくよそへあした様珍奇

井戸 お名も豊の名もあひゆ  
蘿のうきうきうきうき花火壳  
酒巣をタマヘテうきうきうき  
かづくハスカ一あひ多あひ多  
惜ひのうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうきうきうき  
大木の中枝小枝也すれども

友 之 永 保 一 捜 女 珠 伸 若 姿 立 角 立  
松 伸 姿 立 角 立 两 部 第 久 三  
堂 初 抱 係

葦草也小うて重花の葉はうひ  
ぬこをみむちのひあき、花せ者  
湯瓶のひと音うとゆり／＼す  
せり毛うり物ほんに街のうづり  
まのあとのまうり清うある木つみ  
輕折く人さくまことかの那  
花うさくまやれてゐるやせら花  
あす墓／松小葉つまやせら花  
く／＼候やすたは草のむすむき  
夜も夜とてみのまうる葉の花  
咲あきのせ地書きのむり／＼は  
聲うけのからかわ身は都なり

有自  
方舟  
水林  
濱吉  
扇和  
文玉  
扇子  
角月  
壺手  
まゆき  
施子  
左谷

海うのもあくほり母とふ小うる  
事くさりむうり幾のある花ノ集  
附一さくに筆へれど窮ひ花  
日ひうの極や小うの聲の附と  
一ノ晴やゆう第もひつう  
ちうきくもあは花くも花くも  
ゆがや咲やあは花くも花くも  
更科の何をくり、聲くも  
花の葉是も花の聲くも  
落葉や吹く花の聲くも  
冬近く來を僕を、草つす  
赤客を只おひき九月九日ノ年

青芙蓉宇舟方正松  
春荷芝姐葛山沙路  
大曾

由登  
一  
具  
一  
明  
兆  
宝  
一  
助  
之  
女  
九  
乘  
九  
都  
女  
山

すもあらり。九月の事ひ。九  
月も多雨櫻花也。九月度  
を止む。秋も子孫あり。秋ノ事  
萬々てゆけ。御坐る。多難也。余  
形くあり。信と謀の策也。子即  
弟く絆はや。常りせば。曾小姓も。參  
まぬ。今日の事。手す。や。茶の事  
捨す。紀年。風ふ。かく。す。小僧立  
茶の店。大屋も。おとす。に。春。拂う  
の。事。あり。れ。年。麻。ア。車  
年。や。壁。ひ。あ。う。名。の。茶。扇

冬之部叢白

豈

仰の事。はづく。底。ア。風。表  
あ。假。め。也。其。ク。た。す。多。部。の。雪  
季。ち。う。聞。ゆ。そ。う。す。皆  
ま。う。う。行。事。そ。く。ね。ま。の。想。也。な。い  
雪。の。都。新。と。人。つ。圓。ア。氣。季  
辰。移。事。あ。う。ゆ。財。く。と。ま。る。ん。赤  
雪。の。門。將。と。紙。獨。の。何。く。と。ま。る。ん。赤  
柿。の。木。さ。く。と。ま。る。ん。赤  
柿。ふ。く。と。ま。る。ん。赤  
柿。ふ。く。と。ま。る。ん。赤

聖事細ちうりうきのほりうり  
雪行のあうううう小意山  
年計とおもすむ者也雪丸け  
牛たゞかをす事とみ漁舟

于譜  
官右  
山馬

後半日如既見る所是義  
多汗氣性若く不取而  
水相手自乞よアホ  
而ヒ敵の葛糸サクアヒサ  
多應多乞多モ也 桐社の家  
多此是不うち相の相加那

而后  
青波  
音河  
白祖  
翠川

ちとめも出でて遠い巨龍  
母あらへり其の事で附り十石利  
海印ハあそ弟子阿シ納豆付  
松果 蓬の秋叶も鳥可離  
都うちの多うたゞくや冬本立  
机もあひたる事源也の夢臣う  
候也かと事下候子也 冬 桂  
大根引一筋毛をあざれり  
吹ふ風の布散葉落も吹すう風  
十度石、三度風を吹すう風の月  
接するや壁もとく支離ノ房  
薦多かと指以鐵を木竹葉即

寺園

見

瀛山太老周齊董九山葛山谷蘭牙枕流露泉千駢  
多有未艸生子九月灌呻牛馬耕妻詠歸  
事也。水多也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

手作にて舟のきりかくと  
事也。も。も。も。も。も。も。も。も。も。  
事也。も。も。も。も。も。も。も。も。も。  
事也。も。も。も。も。も。も。も。も。も。  
事也。も。も。も。も。も。も。も。も。も。  
事也。も。も。も。も。も。も。も。も。も。  
事也。も。も。も。も。も。も。も。も。も。  
事也。も。も。も。も。も。も。も。も。も。  
事也。も。も。も。も。も。も。も。も。も。

松井一  
有未艸生子九月灌呻牛馬耕妻詠歸  
事也。水多也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

士馬耕妻詠歸  
事也。水多也。也。也。也。也。也。也。也。也。

事也。水多也。也。也。也。也。也。也。也。也。

箕子はす降りて下り升りて守  
 考中かと云ひて御主て大移引  
 めけに坐て本堂あるがま事あが  
 事の事や。何人へまつらひて  
 房うち入をや。廻り茶  
 間油の掃きてある時を余  
 常弓弓の本堂石室の事  
 ゆきの桂不うゆ。小考不平  
 あがり。鳴らゆ。也。松の木  
 を不一や。うそい。池の鶴  
 ひひく。柳の木。の木。の木。  
 おれの木。の木。の木。

伟兒  
 岩山  
 虚白  
 部六  
 部九  
 部九  
 真福  
 素好  
 世良

歳暮  
 桂の木を守りて。事と底ふさう  
 ほくやうの花が。紅色も。實も。廿四  
 緋拂。夜の。拂。拂。不。那  
 人。多たす。す。思ふ。や。ナ。は。ひ  
 桂拂。ハ。三。あ。う。省。ま。思。う。う。れ  
 声。紅唇。守。手。を。了。所。祀。志。る  
 事。あ。れ。う。事。唇。上。門。也。年。の。生

由哲  
 逸閑  
 如如  
 指測  
 小圃  
 千軒

小説書道圖書館

## 跋

菊作草木の筆を以て題す也より  
まつりの相馬をも思庵すが文書  
せよと號して此筆をも和田川の  
高野も其の筆をもあらわす老人の  
筆也と云ふとある。あにておちゆ  
思ひよつたまくおなり神はうむむ  
御も武江すまう先まおむれぬ

宿すに、庚申の日はとほり人出を  
やまく、手杖のねじをもつて見物  
勝手よせく便所の裏の木舟を備へ  
此處の木舟をかたむかべて、うしゆを包  
う。一帳成りて同様の手便あら  
きとも取扱ひの全セ新既に  
端承の事もあらずとよびしきは  
是に改事へよるまことにすとまこと

其の後各城守の兵士がもて候  
おもむかに笑ひあわてて落野の岸へお  
向ひたる事ある間とせんとせんとせん  
殊よめいの事とぞ連するをよむ其事  
用立たざれども、むづかねどもと審るより  
よきの事とぞ思ひておゆふ  
かふをうなぐすからずく  
見立れども、又おゆふ

之ノ一ノ書也ナリ此家法也ス元  
乃れも以シム事ニテシテ  
キモトヨ筆也ナリ

新古今文選

一冊

毛利浦の

新古今文選

一冊

江戸本石町十軒店萬葉堂英大助  
同平吉 藏板俳書目録

類題之部

俳諧叢句五百題 春秋庵白雄房撰

小本二冊

同 新五百題 田喜庵獲物撰

中本二冊

新々五百題 全撰

全二冊

名所千題集 全撰

全三冊

今人東風流

洞海舍涼谷撰  
具庵具校

全二冊

十万句集 全撰

全四冊

續故人五百題 具庵具撰

小本一冊

類聚 八朶園寥松撰

中本二冊

同 同 同 同 同 同 同 同 同

俳諧今人發句集

木本園校輯

中本二冊

俳諧詩句類題

全一冊

全二冊

古今撰

薰菴蟹守撰

全二冊

四季發句帳

印社七五三艸丸大人輯

全二冊

俳諧發句新類題

六合庵万里齋

全二冊

( )句集之部

全二冊

嵐雪句集

林玄峰集

中本二冊

其角句集

坎窩久藏撰

小本二冊

蓼太句集

全六冊

吏登句集

全一冊

巢非句集

全一冊

完來發句集

全二冊

梅翁宗因發句集

全二冊

太無發句集

全二冊

存義發句集

全二冊

獅子眠發句集

全二冊

柳居發句集

全二冊

撻秋瓶

甲斐艸丸集

葛里句集

さくの集

全一冊

護物七部集

乙二七部集

○李寄之 部

變

の葉 華雪庵北元著

俳

諧 手 桃燈 一名能諧初心手引草

小本二冊

同

掌中小本

俳

諧 四季名寄

季考大成の書

中本二冊

俳

諧 袖鏡

全一冊

季

寄 便覽

横本一冊

俳

諧 通言

一枚 捕

俳

諧 文集

小本一冊

新編俳諧文集

あ時子志りゆ

全一冊

俳

諧 變財一覽

一枚 捕

袖

定規 表俳諧定座変体之圖

小本一冊

俳

諧 自初編今天保迄至凡三千編

全二冊

○掌中十珍物

集解 あそび今傳子

掌

中五百題初編

集解 初編

同  
集艸三編

集艸二編

同  
集艸四編

芭蕉叢句集

其角叢句集初編

集艸五編

同  
集艸六編

同  
集艸七編

同  
風雪叢句集初編

集艸八編

同  
乙由叢句集

集艸九編

同  
蓼太叢句集初編

集艸十編

新五百題初編

集艸十二編

二編

集艸十三編

三編

集艸十四編

集艸十五編

集艸十六編

古今撰

猶追々出刻

○假名遣物目錄

不棄用字格

春登上人撰

音便假字格

春登上人撰

本  
木  
樹

今古假字格 高井八穂大人撰

古事記今事記合本一冊

對照假字格 長野義政西大人撰

上一个假字格 千葉土人撰

詠諧田中源の目

桃隣大人撰

小本一冊

おー其改一本

田喜庵輯

全一冊

今人附合集

木木園輯

全一冊

芳草集

松露庵撰

全一冊

俳諧發向故人五百題

全四冊

同

今人五百題

全一冊

吳市阿賀町原  
下垣内和人  
九九

